

万延遣米使節におけるアメリカ体験の諸相 (三) 完

——文化接触と対応の構造——

岡 林 伸 夫

はじめに

第一章 村垣範正のアメリカ認識

——「夷狄」への反発と拒絶——

- 1 村垣範正の略歴
- 2 既成の認識枠組とアメリカ人への第一印象
- 3 「夷狄」に対する反発と拒絶
——夷狄観の意識構造——

- 4 「自己中心的国家意識」と世界情勢への対応
- 5 「西洋技術」の認識 (以上一九七号)

第二章 玉虫左太夫のアメリカ理解

——「礼」の国と「情」の国の交錯——

- 1 玉虫左太夫の略歴
- 2 アメリカ人に対する夷狄観と第一印象の関連

万延遣米使節におけるアメリカ体験の諸相 (三) 完

- 3 「礼」の国と「情」の国の交錯
——アメリカ理解の思考構造——

- 4 「船中体験」の意味

- 5 アメリカ滞在中の見聞 (以上一九九号)

第三章 佐野鼎のアメリカ体験

——「西洋技術」への関心と「探索」——

- 1 佐野鼎の略歴
- 2 幕末の洋学と洋学者
- 3 佐野日記の特徴——「西洋技術」への関心——
- 4 夷狄意識の希薄性と「船中体験」
- 5 「西洋技術」への関心とアメリカ見聞
- 6 文化の異質性をめぐる「探索」の視座
むすびにかえて (以上本号)

同志社法学 四一巻四号

七五 (五五五)

第三章 佐野鼎のアメリカ体験

——「西洋技術」への関心と「探索」——

1 佐野鼎の略歴

佐野貞助^{さのていすけ}は一八二九(文政一二)年、駿河国富士郡水戸島村(旗本秋山安房守所領、現富士市)の郷士の家に、嫡子として生まれた。⁽¹⁾祖父佐野源太夫は幕臣曾我若狭守の家老職を勤めたが、父小右衛門は次男であったために分家して仕官せず、郷士になっていたという。鼎の幼少時のことは全く明らかではないが、長ずるに及んで江戸に出て、かつて「蚕社」の一員であり高島流洋式砲術をもって幕府に仕えていた下曾根金三郎(甲斐守信敦「信之」)の塾で、約三年間にわたって蘭学とくに蘭兵学を学び、一九歳の頃には塾長を務めた。その後は一時秋山安房守(当時幕府小姓組番頭、後一八五九年に山田奉行となる)に仕えていたが、一八五五(安政二)年には第一回長崎海軍伝習生に随行して長崎に遊学している。⁽²⁾一方、加賀藩は一八五四(安政元)年、金沢に洋式兵学校「壮猶館」⁽³⁾を設置し、引き続き数多くの洋学者の人材登用を行った。そして一八五七(安政四)年一月、藩士岡田助右衛門の建議に基づいて佐野は招聘され、「御異風格」として藩士に列せられて禄一五〇石を受け、「新流砲術師範方棟取役」の任と「江戸定府」を命ぜられて、これ以後加賀藩にその活躍の舞台を移すこととなったのである。このころ佐野はすでに外国奉行水野忠徳と面識があったらしく、遣米使節団への参加に際しても、あるいは水野あたりの斡旋があったかもしれないと考えられている。⁽⁵⁾また佐野は、蕃書調所教授方の手塚律蔵ともいつごろから親交があった。⁽⁶⁾そして佐野は、ポーハタン号乗船直前の一八六〇(万延元)年一月一日に長崎遊学の名目で藩の許可と金百両の借用を受け、勘定組頭

支配普請役益頭尚俊の従者として遣米使節に随行したのである。

2 幕末の洋学と洋学者

天保期、アヘン戦争（一八三九～四二年）前後における対外的危機感の高まりを受けて、洋学（蘭学）は大きく変化した。すなわち、「封建制補強のための知識・技術」という基本的性格を変えないながら、従来の医学を主とした「民生的知識・技術に限られ」たものから「『富国強兵』のための知識・技術」を中心としたものへと、その内容を転換させたのである。⁽⁸⁾「その先駆たる意義を担うもの」が渡辺崋山を中心とした同志的グループ、いわゆる「蛮社」であった。⁽⁹⁾「蛮社」は、その一員である幕臣江川太郎左衛門英龍が江戸湾防備問題について崋山の助言を求めたことから幕府保守派の反発をかい、結局弾圧されることとなった。⁽¹⁰⁾しかし、「蛮社」に加わっていた江川や下曾根金三郎ら幕臣は不問に付され、またその直後「アヘン戦争のもたらした対外的危機に対処するため」に水野忠邦を中心として企図された幕府の軍事改革等の施策は、「基本的には、崋山ら『蛮社』と志向を共にしていた」のであり、すなわち「国防などの政治的な分野にまで、蘭学の知識を採用し、その科学的な成果を富国強兵に結びつけ、また世界的視野の拡大にも利用しようとする態度が、幕府のなかにも育ってきていた」⁽¹²⁾のであった。とくに一八四〇（天保一一）年に幕府が高島流洋式砲術を採用したことによって、諸藩も競ってその導入をはかり、その「不備を補い、充実ははかる」ことを中心として、洋学は「軍事科学化」を推進してゆくこととなったのである。⁽¹³⁾

「国防問題」に対処するために洋学の知識が必要不可欠なものとなり、「その修得が政治的意味を濃く持つ」にしたがって、「東洋道徳・西洋芸術」（佐久間象山）あるいは「器械芸術は彼に取り、仁義忠孝は我に存す」（橋本左

内) というような使い分け方式が公表され、洋学者自身が「この框内に止まることを標榜することによって、かえって積極的に働くことのできる保証を支配者から許され」という状況を深め、かたや封建支配者は洋学を藩校の科目に加えるいは別に洋学教育機関を設置して、その「有効性」を自らの「イニシアティブにおいて承認」し「保護勸奨」することによって、それを「教学を補翼する技術の学として、封建教学体系の中に組みこ」んだ。⁽¹⁴⁾ 幕府もまた一八五五(安政二)年には長崎に海軍伝習所を設置して、オランダ人教官による洋学教育を開始し、さらに同年「洋学所」(翌年「蕃書調所」と改称)を設け、日本人洋学者を教授陣に任用して、洋学の教育・翻訳・統制にあたらせることとなった。⁽¹⁶⁾ こうしてここに、西洋の科学・技術の制度的導入が本格的に開始され、日本における「科学の制度化」が始まったのである。⁽¹⁸⁾

軍事科学としての幕末の洋学を担った中心は、以前の医師に代わって、武士であり、それも下級武士が比較的多かったといわれている。⁽¹⁹⁾ これもまた「戦国割拠の情況の凍結」が「解氷」するのに伴う武士における「軍事的思考様式」の「復活」の具体的な一証例であろう。本来儒学者や攘夷論者であった人々が、「夷情を審かにせずんば何ぞ夷を馭せん」(吉田松陰)的発想をもって洋学を学ぶ(たとえば佐久間象山は早くも一八四二年に江川太郎左衛門に入門して洋式砲術を学んだ。また万延遣米使節に随行した熊本藩士木村鉄太は安積良斎の下で儒学を学び「素より攘夷論者であったが……彼を知り己を知るは兵法の要論である、といふ見地から」手塚律蔵の門下となって兵学・航海術等を学んだといわれている)⁽²¹⁾ というように、彼らはまず軍事的関心によって、すなわち来たるべき「夷狄」との戦争において「勝者」となるために、洋学に関心を抱きそれを学びはじめた。そして、諸藩はこぞってすぐれた洋学者をその藩校等に招聘して任用したばかりか、幕府もまた「蕃書調所」の教授職・教授手伝をすべて諸藩から登用したのをは⁽²²⁾

じめ、外国奉行御書翰掛配下の翻訳方・通弁方等にも諸藩等のすぐれた人材（箕作秋坪・福沢諭吉・福地源一郎）を採用した⁽²⁴⁾（このような形で「御雇」となった非幕臣洋学者の一部は、後に一八六四「元治元」年以降続々と正規に「幕臣」化されていくこととなる⁽²⁵⁾）。たとえば「蕃書調所」の教授手伝となった手塚律蔵（佐倉藩）・村田蔵六（宇和島藩）は二人とも周防の出身でありながら各藩に招聘され、さらに幕府に任用されたというように、それらは全く「新しいタイプの人材登用の出現⁽²⁶⁾」であった。こうして一般の武士たちにとっては、洋学を学ぶことは幕府や諸藩の人材登用を受ける近道、すなわちいわば立身出世の手段となり、ここに幕末に出現した「青年層の〈横議横行〉」における二つの類型の一つ、すなわち「制度的上昇」という「個別利益」を追求する——それは「伝統的な忠誠心の空洞化」と「裏腹」であったとされる——「知識志向・実務志向型」の青年達が数多く創出される（しかもその多くは江戸に集中する）こととなったのである⁽²⁸⁾。そして、このように「譜代の恩義奉公関係にもとづかず、学問技術のみをもって登用された」ということは、彼らが従来の家臣的性格をはみ出た、新しい官僚的性格ないし知識人的性格をもつものであったことを示している⁽²⁹⁾とされる。たしかに、洋学を身につけ、伝統的忠誠意識に束縛されずに任用があればどここの藩へでも行くという、いわば社会的流動性を得た専門技術者・専門科学者の登場は、その意味では新しい知識人の出現であるとともに、彼らが最終的には仕官をめざし、封建支配者側も自らの手で彼らを技術職として制度の内に取り込んで行く過程は、むしろ新たな官僚制技術官僚の出現という側面が強いであろう。いずれにせよそれは、「武士『身分』という治者階級が未分化なままにもっていた多面的な社会的機能が、軍人・科学者・語学専門家など特定の社会的機能を遂行する『職業』へと分化しはじめている」という「武士の解体の第一歩」だったのである⁽³⁰⁾。さて、このような「知識志向・実務志向型」の青年洋学者達にあっては、西洋見聞ももはや玉虫のような「敵情探

索」といった意図は表面から影をひそめ、むしろそれは、まず第一に彼らの知識欲・好奇心を充たすものであるとともに、たとえば文久遣欧使節に随行した福地源一郎(幕府外国奉行通弁方雇)が、「……帰路の船中よりして種々の想念を懷き、余が地位の卑き分際にては將軍家御直の御尋は思ひも寄らざれども、御老中方、若年寄衆に至りては親しく御面会あつて西洋の事情を尋ねらるべき歟、(中略) 其實況真情に至りては通弁翻訳の任を承はつたる我等ならでは外に陳述し得る人は有るべからず、是ぞ我等が一躍登庸せらるゝの好機ならん、其時に臨みて御答振に差支ては相成らず、兼て巡回中朝夕筆まめに書留たるは此為にこそあれと心用意に、巡回日記または見聞筆記の類を整頓して以て第一の将来品と楽みたりしは、我も人も蓋し同一の感想にてありしなり」⁽³¹⁾、と回想しているように、彼らが仕える為政者に有効な知識・技術を提供するためのものであり、かつそれによって自らの「制度的上昇」という「個別利益」⁽³²⁾の追求を充足させることができたものであった。

しかも、これらの洋学者達は、現実の政治状況＝権力抗争に対して、尊攘派のような積極的活動を行うことはほとんどなかった。⁽³³⁾ もっとも、万延・文久両遣外使節を契機として西洋事情への関心は大幅に増大し、彼らの一部においては蕃書調所を中心として、もはや単なる軍事科学の域を脱して西洋の政治・社会にまで関心を向けた(福沢諭吉の言葉を借れば「武備の闕^{けつ}を補ふもの」ばかりでなく「経国の本^{もと}に反^{かえ}」る)⁽³⁴⁾ 学習が始まり、⁽³⁵⁾ こうして洋学は、幕末的危機状況の進展に伴って「『富国強兵』のための知識・技術」という基本的性格を保ちつつも、さらに幕藩体制内部を改良補強し「ともかくも外形的には近代的な国家に脱皮しようとする動き」⁽³⁶⁾を支えるための知識・技術として「定着」⁽³⁷⁾し(福沢諭吉が「大君のモナルキ」すなわち幕府の絶対王政化に基づく封建制徹廃を建議したのは、⁽³⁸⁾その具体例の一つ)、それに応じて洋学者は、体制内部において「官僚」としてさらに重要かつ安定した地位を占めていくことにな

った。しかし、そのような西洋の政治・社会に関心を持った洋学者の場合でも、彼らは単にいわば「技術者」(福沢のいう「職人」⁽³⁹⁾)という政治の「道具」⁽⁴⁰⁾として為政者に有効な知識・技術(政策)を提供するという点では、他の洋学者達と共通であった。⁽⁴¹⁾したがって、彼ら自身は、幕末動乱期における政治抗争の表舞台に立つことはなく、むしろそれに対して「無関心」でいるか、あるいはたとえ関心を持っていたとしても(尊攘派による攻撃から身を守るためにも)自ら「無関心」を装って「職人」に身を徹し、⁽⁴²⁾どちらかといえば「少しも幕府のことを感服しなければ、官軍のことも感服しない」⁽⁴³⁾というような中立的ないし客観的立場でいた。そうであればこそ彼らの多くは、幕藩体制崩壊の時にも動乱の渦に巻き込まれず、また「伝統的忠誠心」にとらわれない「制度的上昇の志向性」が「上昇」の可能性を保証する「制度」すなわち国家的権力機構の内部に自己の身を置く必要性を前提としているかぎり、(たとえ一時的に心情の紆余曲折があった場合があるにせよ)さほどの抵抗感もなく容易に明治新政府という新しい「制度」の官僚に転身し、そこで再度「制度的上昇」をめざして相変わらざる職務を遂行してゆくことが可能だったのである。⁽⁴⁴⁾(ただし福沢は新政府に出仕しなかった数少ない例外だが)。

3 佐野日記の特徴——「西洋技術」への関心——

こうしてみると、幕府任用というコースをこそたどらなかったとはいえ、駿河の郷土の子息から身につけた洋学の知識・技術によって加賀藩に登用されていた佐野鼎が、この時期における洋学者の典型的な一人であり、しかもその先端にかなり近い位置にいたことは疑いない。少なくとも日記を残した遣米使節随行者の中ではもっとも深い洋学知識を有していたことは確かである。そして、彼が使節に参加した動機や目的もまた、第一には西洋の軍事技術や航

海技術を実際に目撃すること、しかも単に「敵情探索」という意味ではなくむしろ優秀なそれらを実地に「学習」することにあつたのは、まちがいないであろう。

事実佐野の日記は、往路帰路の船中（とくに往路）においては記述の分量自体は玉虫よりも少ないが、航海技術等に関しては玉虫よりも詳しく、玉虫にはない記述もしばしば見られる。たとえば、船の位置と速度・気温・湿度・水温・気圧の測量方法⁽⁴⁵⁾、入港時の水先案内に関する記載⁽⁴⁶⁾、石炭の価格⁽⁴⁷⁾、スクリー船と外輪船との得失の比較検討⁽⁴⁸⁾、海水を真水に変換する機械への言及⁽⁴⁹⁾、小旗信号について通常と暗号の区別をも交えた記述⁽⁵⁰⁾、英国船とすれ違った際の答礼・交歓の次第をその会話の内容まで細かく記した記事などは、中には簡略なものもあるが、玉虫どころか他の随行者の日記にも一切見られない佐野独自の記録である。このような彼の特徴は、アメリカ東海岸四都市滞在中も同様に見られる。たとえば、フィラデルフィアにおける航海用具店訪問も彼だけのものであるし、鉄道・電信に関してその建設費用をも含めた記述と大西洋海底電線（ニューヨーク・ロンドン間）への言及⁽⁵³⁾、各都市到着時のパレードにおいて歓迎・警備にあたる軍隊の礼式・行軍様式等にまで及ぶ記述⁽⁵⁴⁾なども、随一のものであるといつてよい。ワシントンの海軍造船所を見学した時における武器・弾薬、およびそれらの製造機械に関する記述も同様に他の人々に比しては⁽⁵⁵⁾るかに専門的かつ詳細で、さらに佐野は同所の責任者である司令官に面会して砲術について質問したり専門書を贈られたりという積極的な行動をしている⁽⁵⁶⁾。

また、佐野鼎・玉虫左太夫・佐藤秀長・木村鉄太・小出千之助（小池専次郎）等は各都市滞在中外出を共にすることも多く、知識情報の交換を頻繁に行い、「使節団内部で一種同志的な交わりをもっていた」といわれるが、⁽⁵⁷⁾その中でも佐野が占める役割は非常に大きかったと思われる。たとえば佐野は、使節がフィラデルフィアの造幣局を訪問

し同局に依頼して行った日本貨幣分析の結果について詳細に掲載された新聞記事⁽⁵⁸⁾を自身で訳した「分析に因る日米金銀貨の比較」⁽⁵⁹⁾、および「僕の得たる米版のボウデツチへ人名」の著せる航海書⁽⁶⁰⁾から訳した「羅針版の誤差」といった記事⁽⁶¹⁾を載せているが、玉虫もこの二つとほぼ同じ記事を「友人某」が翻訳したものを得たとして掲載しており、他にも「正午太陽距度表」⁽⁶²⁾「時ノ差」⁽⁶³⁾という、やはり佐野が訳した「ボウデツチ」の書から得たらしい記載がある⁽⁶⁴⁾。玉虫が佐野以外からこのようにまとめた航海等に関する専門知識を得ている個所は見られないから、彼ら「同志的」グループの知識情報交換においては、軍事・航海技術についても、あるいは英語の翻訳についても、おそらく佐野が中心的役割を果たしていたのではないだろうか。そして佐野にとっては、このようにして重ねられ収集された自己の専門にかかわる見聞・知識の一つ一つがすべて、本人が意識すると否にかかわらず、洋学の知識・技術一つで禄を食んでいる自己の能力を磨き、かつ直接に彼の既得の地位を確保し将来のさらなる「制度的上昇」を保証するものとなるであろうことはまちがいない。

しかし、これに対して、アメリカの各訪問都市や寄港地における「政度」「風俗」等の「探索」に関する佐野の心構えはどうであろうか。玉虫にあっては結局のところ往路の船中での体験が最も重要なものとなったが、それはあくまで結果論であって、彼自身の意識としては徹頭徹尾軍事面に限らず「政度」「風俗」をはじめとするアメリカ全体（および各寄港地）に対して「探索」の目標を定め、したがってそこでの見聞を最重要視していたはずである。だから玉虫は、日記本文とは別に、訪問都市・寄港地の各々において、「形勢」「風俗」「氣候」「草木」「生物」「貨幣」「物価」等々の項目に分けながら、しかも訳書から得た知識を加えつつも自分自身の見聞調査を中心として、その総説的記事を長く詳細に記している⁽⁶⁵⁾。さらにはまた別個に「花旗国総説」⁽⁶⁶⁾（これは訳書からの知識が主体となって

いる) を設け、アメリカの歴史・政治・法律・宗教・教育・風俗から誤解と偏見に満ちたものとはいえ人種差別問題に至るまできわめて多岐にわたって記述し、彼の総合的探索に万全を期しているのである。これに比べると佐野は、訪問都市・寄港地について多岐な分野にわたった総説的な「地誌」を付してはいても、ほとんどその全文が「地理志」から訳出引用されたものであり、⁽⁶⁸⁾ しかもパナマ、サンフランシスコ、ワシントンについてはこの「地誌」は付されていないし、「花旗国総説」的記事もない。かといって、他の部分に玉虫のものに相当するような記述があるわけでもなく、たとえば佐野は、ニューヨークにおいては「此の府の詳説あり。友人小出千之助……之を翻訳せり。故に別に贅せず。其の洩るるところ僅かに一二を記載するのみ」、⁽⁶⁹⁾ あるいはフィラデルフィアでは「此の逗留中学校に至りて見る。その模様は後に記するものの如し」、⁽⁷⁰⁾ といずれも「地誌」に委ねてしまつて自らの見聞を軽視するかのような発言すらしている。したがって結局彼の「政度」「風俗」等の「探索」は、地理書の全面的引用でお茶を濁しているといつても過言ではなく、少なくとも軍事・航海技術の見聞に対する彼の熱意に比べると第二義的位置に置かれて⁽⁷¹⁾ いる感は否めない。

4 夷狄意識の希薄性と「船中体験」

さて、話を出航直後に戻そう。佐野は出航するや否や相当本格的な英語学習を開始し、その書簡において「船中通航……米人僧士官所ウヲトへ人名」ニ付て英語相学申候、一船皆米人故其儀も十分、⁽⁷²⁾ あるいは「日々英語ヲ朝九時より十二時迄、夕四時より五ツ半迄、日より兩度充伝習申候」⁽⁷³⁾ と伝えている。⁽⁷⁴⁾ もちろん彼にとってこれが最初の英語学習であつたかどうかは疑問であり、むしろ先述した(あるいは後述する)彼の英書翻訳やアメリカ人との交流に

おける英語理解力からみて、彼がすでにある程度英語の素養を有していた可能性は高いと思われるが、とにかくこの英語学習からも、彼の遣米使節参加が明確かつ特定の目的意識を備えたものであることがうかがえよう。

出航直後の大暴風雨においても、佐野の最大の「驚き」といえるものは、やはり書簡に「乍レ併誠航海ハ驚歎至極、如レ此大危難も能防禦を尽し無難ニ打過申候」としたためているように、まずアメリカ（西洋）の航海技術の優秀性にあったといえよう。そこに彼が持つ第一の関心とアメリカ人に対する評価が存することはまちがいない。しかし、佐野がこの大シケの中で最も注目するのは、他の随行者が誰一人として記していない、一人の日本人の行動である。

昨夜中の暴風にて、船中に海水打入り、貯へ置ける端舟一艘を奪ひ去らる。日本人の為に設けたる、食料調理所の近傍に置きたる大根の香の物の桶・醬油桶・酢桶・味噌桶・飯櫃及び薪等の類も亦流失して、翌朝は速かに食事を調ふること能はず。且つ各人船氣の為に病を生じ、譬ひ食物充分なりといへども食すること能はざるべしとて、此の朝賄方のも一人、甲斐々々しく衆に先立ちて起出で、貯へたる餅を出し、火に焼きて衆人に一二片を与へたり。これにて飢を凌ぎ、彼の者の働きを感じ、後彼の者の素生を聞きしに、元来大船乗の水師なりしといふ。さもあるべし。常人にては此の業は為し難かるべし。⁽⁷⁶⁾

この賄方は、後に持病（梅毒）が悪化し結局サンフランシスコから威臨丸に託して帰国させることになったと佐野が記していることから、⁽⁷⁷⁾武蔵金沢の船乗・半次郎であると知られるが、⁽⁷⁸⁾この人物に対して佐野が示した高い評価は、航海の場における経験的知識の有無を判断の基準にしたものといえよう。さらにまた彼は、サンフランシスコの海軍造船所で再会した旧知のある人物に対してもこう述べている。

製作場あり。……此の中に入りて種々のものを見る中に、菊太郎と云ふ者に逢ふ。此の者威臨丸に乗込み来るも

のなり。彼も又前年長崎初回の伝習のとき同船せるものにて、鍛冶職を業とし、造船術中鉄部の細工方を委しくなすもの、当時に於て彼を最とするなるべし。此の度も其の目的にて来るなり。彼のものの頻に機械にて鉄を延ばし釘を作る等の業を、米人と共に為し居れり⁽⁷⁹⁾。

菊太郎は江戸築地の鍛冶職人であり、この人物に対する佐野の高い評価もまた、造船技術への習熟を判断の基準にしたものといふことができる。しかも、半次郎も菊太郎も国内の身分秩序においては「下賤」の人でしかないはずなのである。このように佐野が、身分の「上下」という体制イデオロギー的意識に捕われることなく、航海・造船（これらは評価の対象に応じて他のものに置換できる）等の技術・知識を価値基準として評価する視点を持っていることは、注目に価する。なぜならその基準は日本人ばかりか西洋人に対してもそのまま適用することが可能であり、両者を同質のレベルで評価できるからである。

事実佐野においては、アメリカ人に対して儒教的価値観の一つとしての夷狄観どころか単なる偏見といえるようなものでさえ全く見られないようである。それはまず第一に、彼の日記には「夷」に類する言葉が全く使われないことから分かるであろう⁽⁸⁰⁾。彼にとってはアメリカ合州国とアメリカ人は、卑しむべき「夷国」や「夷人」ではなく、また正体不明の「異国」や「異人」でもなく、あくまで具体的な、世界の中の一国家とその人民としての「米国」と「米人」であったといえよう⁽⁸¹⁾。もっとも、単に「夷」という用語が使われないだけなら、強固な夷狄意識を保ってはいても言葉だけ言い換えることが可能であるから、確かな証拠とはいえない⁽⁸²⁾。しかし第二に佐野は、村垣・玉虫をはじめ他の随行者の多くが頻繁に書き留めている「人情は同じ」的、ないし「親切」「勤勉」といった、アメリカ人と航海を共にして持つ第一印象を全く記していない。彼らがそのような第一印象を記すのは、多くの場合従来持っていたア

メロカ人に対するイメージ（偏見）がその現実の姿と齟齬をきたした時であろうから、佐野が第一印象を持たないか少なくとも特筆していないのは、彼が従来から抱いていたメロカ人のイメージとほとんど齟齬するところがなく、つまり彼がメロカ人に対する「夷狄」的偏見を抱いていなかったことを示しているといえよう。それどころか、佐野が船内のメロカ人乗員に関して記すとき、そこには佐野独特の特徴ある視点が見出される。まず、ポーハタン号と別れなければならないパナマ到着の前日、彼はこう述べている。

明日はパナマ港着なる故に、船中の米人も甚だ別を惜み、夜に入りては日本人の部屋に來りて、別れを告ぐること甚だ切なり。又此の方にも数月の間同船して、危難を共にせしことなれば、各名残を惜しむ。又此の船は日本人上陸の後、再びサンフランシスコ港に至りて船を修復する由。然れば乗組の米人等、折角家郷に近く來りて妻も見ること能はず、再び他方に至る心中を察すれば氣の毒なり。且つ此の船は本国を去りて三年と聞く。乗組の中に笛役のものあり。其の家ワシントン府にありて、未だ妻は持たず、母及び妹ありと。彼はいく、日本人若しワシントンに至らば、一封の書翰を与ふべき間、必ず我が家を訪へと、甚だ切にいひき。其の他兩三人も書状を伝附せしものあり。⁽⁸³⁾

このようなポーハタン号乗員との交流の模様を記し彼らの心情を思っているのは、佐野以外にない。それだけ英語力もあった彼が普段からメロカ人乗員との交際が深く、感慨も強かったということだろうか。さらに佐野は、ロアノーク号乗員の病死による「水葬」に際しても、その一部始終を記したあと、他の人々には全く見られない感想を付している。

……此の体を見て誠に哀傷を催さざるものなし。彼等の妻子等は、定めて家郷に在りて帰帆を待つべきに、空し

く洋中の魚腹に葬るとは甚だ悲しむに堪へず。此の時日本人の内にも、過日パナマ狹隘を越ゆる前より病むものあり。此の頃殊の外様子あしき故に、今日のことは秘して、彼の病者には聞かせざるやうにしたり。⁽⁸⁴⁾

もちろん、村垣でさえ「いとあはれなることゝもなり」⁽⁸⁵⁾と述べているように、他の人々はほとんど直接的な悲しみの言葉を表していないとはいえ、このアメリカ人乗員の洋上における無念の死にいくばくかの悲しみを覚えなかった日本人随行者はいなかったであろう。しかし、村垣や玉虫が明らかに「夷人」の死そのものよりも他のことに眼を奪われていた（いかざるをえなかった）のに対して、佐野は死そのものだけを見つめ、それをめぐる人々の感情への心づかいを、アメリカ人の死者とその遺族に対しても日本人の病者に対しても配っているのである。⁽⁸⁶⁾したがってこれら二つの事例は、佐野が、アメリカ人に対して何ら偏見を抱くことなく、無意識の内にも日本人に対する場合と全く同等にアメリカ人の心情を思いやりそれに率直に感情移入できる（さらにそれを素直に記述できる）感性を持っていることを示してはいないだろうか。

このように、身分秩序意識に捕われずに人間を評価し、夷狄意識（偏見）にも捕われることなくアメリカ人と交流するような独自の視点を、なぜ佐野は持つことができたのであろうか。彼に徳川体制の支配イデオロギーたる儒教の素養がどの程度あったかは不明であるが、当時の一般教養程度の素養があったかもしれないことは充分想像しうる。⁽⁸⁷⁾しかしそれは、たとえいくらあったとしても、彼自身の意識においてはイデオロギー的機能を全く果していないといつてよい。なぜなら、彼の日記に見る限り、彼が儒教イデオロギー的視角から対象を見ることは皆無であり、「夷」に限らずいかなる意味においても儒教的価値観を包含するような用語が使用されることはないようだからである。だが、そのことは彼自身が自覚的に、儒教イデオロギーを徹底的に批判し克服した結果であると見なすには、少々疑問が

残る。というのは、それならば彼の日記に、たとえば世間ないし同僚一般の中に蔓延する夷狄意識といったものに対して何らかの批判あるいはそれを匂わす言動があってよいはずだと考えられるのだが、それは全く見られないからである。⁽⁸⁸⁾むしろ佐野がこのような独自の視点を有することができたのは、幼少期に受けた教育がどうであれ、比較的若い頃から（一九歳で下曾根塾々長になっているから、少なくとも十代半ば頃から）洋学中心の教育を受けて、彼の関心が非常に西洋の軍事などの技術・知識に偏したものになっていると思われること、また彼自身が徳川体制のイデオロギーから比較的自由になる可能性の高い社会的存在であること（および彼の性格）などが複合的な要因となって、彼の体制イデオロギー的意識をなしくずし的に希薄かつ無意識なものにしてしまったためであるかもしれない。すなわち、武士階級内部のこととはいえ駿河の郷土の子から洋兵学の腕一つで藩の壁を乗り越え武士内部の細分化された身分をも突き破って加賀藩の要職に就いた彼は、いわば身をもって徳川体制のイデオロギーを突き崩そうとしている存在であり、たとえ本人が自覚せずとも、体制イデオロギーの意識を必要ともせず、それが希薄化していくであろうことは、十分に考えられうるだろう。⁽⁸⁹⁾

それでは、このように佐野において儒教イデオロギー的意識が希薄化し、いわば「脱イデオロギー」的状态が示されていることは、とくに玉虫と比較した場合、佐野の日記全体あるいはアメリカ人に対する考察にどのような影響を及ぼすであろうか。端的にいえば、それはかえって逆に、彼のアメリカ人に対する関心をきわめて薄弱なものにしていくのではないか、と思われるのである。玉虫は強固な夷狄観を持っていたが、それゆえ夷狄意識とアメリカ人の現実との差を意識して彼らの実体を知ろうとその一挙一動に注目し、しかも「礼法」観念を強く持っていたがゆえに、アメリカ人の社会的人間関係に激しく違和感を覚え、そのイデオロギー的意味（すなわち異質性）を考え理解しよう

としていたはずである。ところが佐野は、夷狄意識ないし偏見がないためそれとアメリカ人の実体との差を知ろうとすることに全く無関心なようであり、はじめから日本人との相違を前提とすることなくアメリカ人と接している。しかも「礼法」観念も持たないようだから（実際佐野が、村垣や玉虫のような意味でアメリカ人の「礼」を問題にすることは一切ない）、アメリカ人の社会的人間関係に違和感を覚えることがなく、それが有する意味（異質性）について関心を示すことも意識することもないのである。事実佐野は、先に引用した記述から見てアメリカ人乗員との交流が玉虫よりはるかに広く深いと思われるにもかかわらず、それら以外にアメリカ人乗員の行動を記すことがほとんどない。すなわち、玉虫が注目してやまなかった点呼風景（これは彼の最も重要な考察となった）や軍事訓練について、佐野はそれらがあったという事実さえ全く記していない。玉虫以外には誰一人注目しなかった点呼はともかく、多くの随行者が興味を示している軍事訓練について人一倍洋兵学への関心が強いはずの佐野が何ら記録していないのは全く不思議なように思える。⁽⁹⁰⁾しかしそればかりか、玉虫が受けた最初の衝撃というべき暴風雨時の「船将始メ自ラ船上ニ出テ、水夫ト共ニ勤勞ヲ同フシ」という点については、佐野は「米国の将官等、終夜厳しく水夫等に下知して警戒す」⁽⁹²⁾とのみ記し、また「水葬」において玉虫や村垣があれほど「驚き」を示した「船将」自ら式に参列し「水夫タリトモ船将悲歎ノ色外ニ顯ハル」という点についても佐野は「船中将官等悉くここに出で……衆人皆涙を流す」⁽⁹⁴⁾と、いずれの場合も「船将」の行動を特筆してはいないのである。これらのことはすべて、佐野にとっては軍艦上・航海上において常識的なきわめて当然の光景であり、何ら注目するに足りないことだともいうのであろうか。

このように佐野が、アメリカ人乗員の人間関係やその社会的存在に何ら関心を示さずそれらを観察することがないのは、また、対象の見方に関する彼個人の（あるいは技術者としての）⁽⁹⁵⁾性格的特徴が介在しているとも考えられよう。

暴風雨と「水葬」における「船将」の行動や点呼風景その他アメリカ人乗員の活動を、玉虫は一貫して一種の人間関係の集合体としての社会組織として捉える視点から観察していた。それは軍事訓練についても例外ではない。軍事訓練は、同じく軍事に関わる問題とはいえ、単に兵器やその操作といった軍事技術の問題であるよりも、むしろ軍隊という名の一社会組織の（特定の目標を達成するための日常的な準備と努力をなすかという）運用の問題という側面も強いであろう。だからこそ玉虫は、暴風雨以来一貫して社会組織を視る姿勢の中で、「治^{ニセ}不忘^レ乱者ナリ」といささか紋切り型の言葉を使つてではあるが、いわばアメリカ人の社会意識の一端として軍事訓練を観察評価し、かつ日本の場合と比較していたはずである。⁽⁹⁶⁾ところが佐野は、これらアメリカ人乗員の活動を一つの社会組織として視る姿勢を全く欠如させているらしく、いわば「物」（機械・兵器等）やそれを造り出す手段としての「技術」には深い関心を示すが、「物」を造り出す基盤である「人」やその集合体としての「社会」に対してはほとんど興味を示さない性格のように思われるのである。⁽⁹⁷⁾

5 「西洋技術」への関心とアメリカ見聞

こうして佐野は、結局往路の船中においてアメリカ人に対する「驚き」をほとんど経験せずアメリカ人やその社会についてのイメージを形成しないままワシントンに到着することになると思われるのだが、その到着後の見聞にも、以上のような彼の「船中体験」に見られた特徴がより明白に表れるだろう。玉虫が注目し「大胆な解釈」を加えて考察していった各々の見聞に対して、佐野もまた彼独特の特徴ある記録をしてゆくのであるが、たとえば次に掲げるのは、玉虫がその立地条件を「花盛頓^{わしんとん}ノ遠謀」と評しホワイト・ハウスと合わせてアメリカの国家イメージを膨らませ

ていった砲台（モンロー要塞）に関する佐野の記述である。

各上陸して砲台中に入る。其の築造の計画は、八稜にして毎稜將棋頭に作る。和蘭に用ふる所と大同小異にして、只砲数を多くせん為に、穴蔵の如く作り二層となすの違ひのみ。周囲には水濠を繞らし、又其の外にも一廓を置き、用ふる砲は悉く鉄造にして、口径五寸以上より九寸二分迄なり。惣計四百余挺を備へ、警備の兵数三千人許恒にここに居住すといふ。惜しいかな刻限僅少にして十分に見尽くす能はず。然りといへども概略を記憶す。後來築城書を読むときの一助ともならんか。⁽⁹⁸⁾

砲台の建築構造に関する觀察だけをとれば実は玉虫のほうが詳しいのだが、砲の口径や兵数の記載は玉虫にはない⁽⁹⁹⁾。ましてオランダの砲台と比較し、かつこの見学を今後の研究に活かそうとする意志を明確に表明しているあたりは、佐野の専門家としての面目躍如といったところである。ただ、ここには砲台の立地条件については何も書かれていないが、玉虫が驚嘆して記したような考察は、すでに佐野の師下曾根金三郎が参加していた「蛮社」の領袖渡辺華山が『諸国建地草図』（一八三九年）において示している見解であり、佐野にとっては自明で何ら特筆するに値しない常識的な知識だったのかもしれない。しかしたとえそうだとしても、少なくとも佐野の記述においては、玉虫のように対象を觀察することによってアメリカの国家が「解釈」されたりそのイメージが思い描かれたりすることはない。そのような傾向は、ブキャナン大統領との謁見・国書奉呈の場に関する彼の記述においてより明らかとなるであろう。そこでは、まず佐野は、使節一行の服装については簡略とはいえ記している。しかし、ホワイト・ハウスの建物およびその警備に関してもこのセレモニーの式次第についても、「大統領の家に至り、一つの広き室にて国書を呈す」⁽¹⁰¹⁾の一文でかたづけられているにすぎない⁽¹⁰²⁾。とくに他の随行者においては注視の的となることが多い使節・大統領双方

の「礼儀」の一部始終について全く記録していない点には、「礼」への関心すなわち徳川イデオロギー的価値意識がきわめて希薄な佐野の特徴が表れている。しかしそれよりも、このセレモニーの席において、彼は大統領以外のものに眼を奪われているらしいのである。

大統領をデュームス・ポカナンへ今年齡六十九歳なり。彼の千八百五十七年の二月四日に於て、挙げられて統領となる。といふ。合衆国には天子も無く、又国王もなく、衆人の望に叶ふ者を挙ぐることにす。其の法国中の人民入札をなし、其の同名入札多きを挙ぐ。故に庶人といへども、其の身の徳に人望の帰するときは、自ら貴きを得。任にあること四ヶ年にして、又別人を撰むこと前の如し。若し又尚ほ他に挙ぐべき人なく、前任のものの所置国の為に大いに利あるときは、再び任を受けて更に四ヶ年を勤む。以上八年の後決して再び任することなく、別人を挙ぐる法とす。当代の大統領は、建国以来第十五代目の統領なり。正面に出でて三使に對す。其の傍には合衆国の軍事惣督ゼネラル・ヘンリー・スコット（人名）あり。へ此の人齡八十二歳、身材六尺五寸。メキシコ國戦争のとき功あり。當時彼の國の補と稱す。其の他許多の文武の官人列居す。大統領の服等は、別に異なりたる飾もなく、文官のものも俱に然り。只武官のものは官の高下に因りて悉く瞭然たる區別あり。何れも両肩にイボレットといへる金糸の房を以て飾となす。其の階級種々あり。平時は取離し置き、威儀を正すべき時にはこれを掛くるなり。又細袖の腕首に、金色の筋を付けて級を分かつ。其の筋の多きものは貴し。且つ冠りものにも區別あり。又刀を帶ふる者は武官のみに限る。⁽¹⁰³⁾

この一文の最初の割注に見られるブキャナン大統領自身に関する知識は玉虫には全くないものであり、また大統領選挙についての知識も玉虫のような後継者の地位的限定が書かれていないだけ「禅譲」イメージから抜け出しており、

知識としては、玉虫よりもはるかに優れたものだといえよう。⁽¹⁰⁴⁾ところがこの記述において、佐野自身の眼による大統領の観察は、わずかに「大統領の服等は、別に異なりたる飾もなく」という一言だけにすぎない。もちろん彼もそこにある程度「驚き」を持ったことはまちがいないのだろうが、⁽¹⁰⁵⁾しかしその「驚き」を吟味しそれと関連する周辺の光景を目撃してイメージを膨らます間もなく、彼の眼は「元帥」と「武官」に対する圧倒的な比重の観察に移ってしまっているのである。木村鉄太によれば、この時三使（正使・副使・監察）⁽¹⁰⁶⁾の前に並んだのは向かって右から副大統領・大統領・財務長官および佐野の言う「元帥」の四人であるらしい。しかし、他の随行者の場合たいはいは、玉虫のように大統領だけに注目し（その「驚き」があまりにも大きいため）それ以外には全く言及されることがないか、あるいは木村のように大統領以外についても満遍なくその官名が列記されるかのどちらかであるのに対して、大統領以外に「元帥」にだけ注目している佐野の視点はきわめて特異である。また、式場の横手に居並ぶ文官武官のうち、武官の服装や階級章を観察しているのは、佐野を除けば「武官はイポレットへ金にて造りたる総の如きもの両肩につけて官の高下に寄りて長短有なり」を付袖に金筋へ是も三筋を第一とし二筋一筋と有り合衆国は此鎊はかり西洋各国のゑりに飾りもあり有太刀も佩たり⁽¹⁰⁷⁾と記している村垣がいるくらいである。この村垣の心理的背景には、おそらく大統領を筆頭とした「上下の別」のないアメリカ人の行動にいらだった彼が、アメリカ人にも身分秩序や「礼」に匹敵すると思われるものが存在することを何とか階級章や帯刀の中に見つけ出して、わずかでもいらだちを抑えようとする意識があったにちがいないだろうが、佐野には村垣のような意識があるわけではなく、「元帥」や「武官」に対する注視がもっぱら佐野の専門（洋兵学）的関心からなされていることは確かである。しかし、武官の階級（佐野がこれを身分制とは全く異質なものだと理解しているとする根拠はどこにもない）と大統領の平服という二つのものが、佐野のアメリカイメ

ージの中でいったいどのように関連づけられているのか全く不明である。それどころか、武官の階級への過大な関心と記述は、大統領に対する「驚き」を解消させ、大統領とそれに象徴されるアメリカ政治の意味を問いかけようとする方向を塞いでしまっていないだろうか。

その意味では、国会議事堂を見学した時の佐野の感想は重要である。なぜならそれは、彼の専門的関心がアメリカの政治と直接に関わりそれに眼を向けざるを得ない事例となったからである。彼の記述は実際に傍聴席からなされている。だが、玉虫が傍聴者Ⅱ「衆」から見たアメリカ政治の大胆な構図を呈示していたのに対し、佐野はある一点だけにこだわっているようである。

……何れの評議の時といへども、庶民貴賤を論ぜず婦女子に至るまで、閣中の上段の棧敷に來りて聞くことを免さる。僕のここに來りし時も評議ありて、多数の議員集り論定せるを、士女夥しく來りてこれを聴聞し居たり。僕等四五人同伴して至りしに、或米人僕等を誘ひて棧敷に入り聴聞せよといへり。僕未だ此の事を知らざりし故に、必ず彼の邦の宗法などの講義ならんと思ひたれども、何の事件なるかを問ひしに、政事の評議なりといふ。帰後尚ほ疑ひて通辭役に問ひしに、実に然りと答ふ。按ずるに、悉く秘密なきこと能はざるべし。軍機必ず密ならずんばあるべからず。然らざれば害必ず生ずべし。然りといへども政化同じからざるが故に、前にいふ如くにも害なきか。今旅客の身にして暫時の逗留といひ、且つ言語の相異は論を待たざるが故に、其の状を得がたし。後來彼の書籍によりてこれを考ふれば、稍実を得べしと思はる。⁽¹⁰⁸⁾

疑問を抱き再度尋ねたところに、佐野の「驚き」が表現されている。そして、すぐに「軍機」Ⅱ軍事機密の問題を提起することなどいかにも彼らしい興味の示し方であり（事実このような観点から国会を見た随行者は他にない）、

そのためにさらにアメリカの政治・議会制度に関する知識を得ようとする意欲が生じているらしいことは評価すべきであろう。しかしこの記述に見る限り、彼の関心はあくまで「軍機」の扱いを中心としたものであり、アメリカの「政化」＝政治文化自体とその異質性に対してどれだけ関心が向けられているのかは疑問である。むしろここでも「軍機」という佐野の専門的関心が登場することによって、「政化」の異質性は「同じからざるが故」ともはや既知の前提のように扱われて、「政化」や議会そのものに対する「驚き」を曖昧にし、それ自体の異質なる本質を探ってアメリカの政治に関するイメージを展開しようとする道を妨げてはいないだろうか。つまり、「政化」の異質性という本質的テーマではなく「軍機」の扱いという個別的テーマの日米両国における相違しか問題とされていない印象を受けるのである。

こうしてみると、ワシントン到着後の見聞における佐野の記述に共通する特徴は、彼の専門的関心が遺憾なく発揮され、かつ知識や観察の正確さという点ではしばしば玉虫より優れているにもかかわらず、玉虫のようにそれら知識・観察の一つ一つがアメリカの国家・社会・人間のイメージに結びつけられて理解され、また観察対象の中にアメリカの政治・社会理念（と彼が考えるもの）の具象を読み込み解釈しようとする——ただしこれは玉虫の特殊な志向性ともいえるのだが——がないばかりか、知識と観察が積み重ねられることによって新たなアメリカのイメージが形成されようとする指向すらほとんど感じられないことである。専門的関心を駆使した佐野の観察は、しかしその関心の範囲内にとどまってアメリカの全体像には結びつきがたく、また彼の関心が及ばないところを埋めるかのように補われる知識は、悪くいえばその場その場での単なる羅列である（「地誌」も各都市ごとのばらばらな知識である）。しかも、彼の（専門以外の）知識が観察対象を拡張活用されるということもほとんどない。⁽¹⁰⁹⁾したがって結局、玉虫に

においては強烈に伝えられていた全体的なアメリカのイメージとその異質性が、佐野の記述からはきわめて印象の薄いものとしてしか伝わって来ないのである。

6 文化の異質性をめぐる「探索」の視座

佐野のアメリカ見聞がこのようなものになるのは、直接的には玉虫とちがって、往路の船中においてアメリカ人とその社会に関するイメージが形成されず、アメリカ理解の枠組が持たれなかったことによるものであろうが、より根本的には、おそらく徳川体制からの脱イデオロギー的傾向が顕著な佐野が、個々の知識を有しているにもかかわらず、アメリカの政治・社会体制全般におけるイデオロギーないし理念に対しても、関心がきわめて希薄になっていることによると思われる。したがって、たとえ西洋技術という専門的関心のレベルにおいて個々の相違が比較批判されることはできても、異質な政治・社会に対しては知識としてその異質性が前提とされるだけでそれ自体に関心が持たれることはなく、ましてやその異質性の意味が問われ理解されることも、それを通して日本の政治・社会に対する「問い直し」がなされることも、展開の余地がなくなるのであろう。そもそも「問い直し」ができるほど彼が日本の政治・社会についての意識を持っているかどうか疑問なのである。そのことは、たとえば佐野が、ニューヨーク出港の前日、船に積み込む使節団の荷物があまりにも多いのに驚いて、「異国人は将官といへども従者なく、且つ荷物も革箱一個位より多く持参せず。尤も衣服の制度も異なる故に然ることなれども、航海等には別して行装を簡易にせざれば甚だ困難なり」と批判していることによく表れている。すなわちここでも、「従者」や「衣服の制度」の異質性は単に知識として前提にされているものの、あくまで「航海」の場という彼の専門的関心に限られた範囲での「行装」の

改革しか問題にされておらず、「従者」と「衣服の制度」に体现されているイデオロギーの意味、すなわちそれらが「格式」と「礼」（名分論的秩序観）に応じた従者の数と衣装の着替えであるという意味で徳川体制の秩序から必然的に生じそれを具現しているものであるという側面には、決して批判の眼は向けられず、意識されていることさえ疑わしいのではなからうか。

したがって、航海や軍事に対する関心だけでも、それが人間の社会組織・社会意識に関わる側面にまで及べば、そこから観察対象に内在する文化の異質性を「意識化」してゆくことは可能なはずであろう。ところが、その関心が科学・技術の側面に限定され、それに応じて観察対象も限定される傾向が強ければ強いほど、文化の異質性に「驚き」を持ちそれを「意識化」してゆくことは困難さを増すように思われる。このことは、福沢諭吉が『自伝』で回想している一挿話に鮮かに表現されているであろう。この遣米使節団においては正使一行ではなく護衛艦咸臨丸に木村摂津守従者として乗船しサンフランシスコまで渡航した福沢もまた、佐野と同様に洋学者として科学・技術に関する知識と関心を豊富に持っていた。そしてサンフランシスコ滞在中、アメリカ人に「諸方の製作所」を案内され、電信や「ガルヴァニの鍍金法」などの科学技術を見学するのだが、その感想を福沢はこう記している。

そこがどうも不思議な訳で……アメリカ人の考えに、そういうものは日本人の夢にも知らないことだろうと思つて見せてくれたところが、此方はチャント知っている。これはテレグラフだ。これはガルヴァニの力で、こういうことをしているのだ。また砂糖の製造所があつて、大きな釜を真空にして沸騰を早くするということを遣つてゐる。ソレを懇々と説くけれども、此方は知っている……（中略）此方は日本に居る中に数年の間そんなことばかり穿鑿してゐたのであるから、ソレは少しも驚くに足らない。(三)

福沢は自分が「驚き」を持たないこととアメリカ人側の意図とのずれに對して「不思議」がっているわけであるが、「驚き」を持たないという点については佐野も全く同様の体験をしていることは確実だと思われる。というのは、たとえば実際に電信を見学して、玉虫をはじめとする人々がその機械設備の構造や通信方法だけを詳細に記録しているのに反して、佐野はそれらに全く見向きもせず、電信線の建設距離と建設費、および電信技術の最先端といえる大西洋海底電線についてだけ記載しているのは、彼が最早すでに電信のことなど「チャント知っている」からにちがひなかったと考えられるからである。ただし右の福沢の感想は回想であるから、多少誇大な表現になっていることは確かかもしれない。なぜなら、いくら日本で「そんなことばかり穿鑿していた」からといって、初めて見る実物を関心に満ちあふれたまなざしで観察しないはずはないと思われるからである。しかし、一九世紀の西洋において技術と密接に結びつき「制度化」を一段落させて高度に発達しつつあった近代科学は、その過程で「教科書化」されることによって誰にでも学べるものとなり、「特定の歴史的・文化的伝統や世界観」をすべて「払い落とし」てどこへでも普遍的に「移植可能」なものになっていたとされる。⁽¹¹⁵⁾したがって、そのように西洋の「文化的伝統」をも「払い落とし」た科学・技術という観察対象を、それを学んだ知識と関心（すなわちこれは西洋の「文化的伝統」とも日本のそれとも結びついていないことになる）からのみ注目すれば、いわば観察対象と観察者の知識・関心がその間に異質性の介在しない同等質なものとなり、それによって観察対象の背後にある「文化的伝統」を見失いやすく、ましてやその異質性には気付き難くなるのではなからうか。だから福沢の経験は、たとえ彼が現実には関心に満ちあふれて対象を観察していたとしても、自分の知識が実際に追認されていくだけの、同等質な範囲内における知的満足感にすぎず（すなわち異質なものから受ける衝撃がない）、それゆえ彼は「驚くに足りない」と断言したのであろう。

さらに言えば、今まで全く知識を持ち合わせていなかった最先端の科学・技術を見せられて驚いたとしても、それは知識の獲得と実物の観察が同時に起こり「チャント知っている」べき事柄が一つふえただけのことである。このように、観察者の関心と観察対象が同等質の枠内に限定されているかぎり、異質な文化に対する「驚き」も「意識化」も発生しがたいだろう。その証拠に、福沢がサンフランシスコ滞在中に最大の「驚き」を抱き、そして以後彼が「文化の相違性」を「意識化」して創造的思考を展開してゆく出発点となった体験は、全く別の方向からもたらされたのである。

ところで私が不図胸に浮かんで或る人に聞いてみたのは外でもない、ワシントンの子孫は如何なっているかと尋ねたところが、その人の言うに、ワシントンの子孫には女がある筈だ、今如何しているか知らないが、何でも誰かの内室になっている様子だと如何にも冷淡な答で、何とも思っ居らぬ。これは不思議だ。勿論私もアメリカは共和国、大統領は四年交代ということは百も承知のことながら、ワシントンの子孫といえば大変な者に違いないと思うたのは、此方の脳中には、源頼朝、徳川家康というような考えがあつて、ソレから割出して聞いたところが、今の通りの答に驚いて、これは不思議と思うたことは今でも能く覚えてゐる。理學上のことについては少しも胆を潰すということとはなかったが、一方の社会上のことについては全く方角が付かなかった。(116)

今度の「不思議」は、まちがいなく異質な文化に対する「驚き」である。だがこれは、共和制および大統領に関する「百も承知」の知識、すなわちアメリカの政治・社会についての表層的知識から必然的にもたらされたものではない。それは、「不図胸に浮かんだ問いによってはじめてもたらされた。その問いは、いわば日本(政治社会)の文化の本質的価値に根ざした常識ともいえる自明の意識を体现したものであり、それが相手側の同様な自明の意識をさ

らけ出した答えを得て彼我の差異が明確にされることにより、改めて「百も承知」の事実・知識が見直され再認識され、福沢の眼に日米両文化の異質性が明白となったのである。しかも、彼の「驚き」は単に政治体制（制度）の違いといったものに向けられているのでは決してない。それは、そのような政治・社会（そればかりか、他のあらゆる分野、科学・技術に至るまで）を作り上げその中で生きている、文化の基層ともいうべき人間の存在・生活・意識に対して向けられていると見るべきであろう。福沢のみならず玉虫においてもまた、その「驚き」の一つ一つがこのような人間のあり方に向けられていたことはまちがいないのである。⁽¹⁷⁾そして、このような「驚き」を経て可能となる文化の異質性の発見によって、はじめて個々ばらばらな知識や観察の各々が結び合わされて異質な文化についてのイメージが形成され、それを軸としてさらに知識・観察が付加していくにしたがって、充実な「文化の相違性の意識化」が期待できるのである。⁽¹⁸⁾

しかし佐野の場合、福沢のような問いを発し、人間のあり方に関心を示すような傾向はない。関心と観察対象が科学・技術に限定される傾向が強く、それが科学・技術の根底にあってこれを支える人間のあり方（自然観や人間観）の問題にまで行きつけられともかく、特定の「文化的伝統」からの独自性と他への移植性が強い表層的な科学・技術の成果の範囲に限定されるほど、基層にある文化の異質性を見失いやすい。これに比べれば、政治・社会に関する事象のほうかはるかに基層の文化・人間のあり方との密接な関係が強く、その異質性を認識しやすいであろう。ところが佐野は政治・社会に対する関心がきわめて希薄になり、ましてや人間そのものに対する関心も乏しくなっているから、文化の異質性を認識する契機は著しく稀少なものになってしまうのである。その意味では、政治・社会や人間倫理（すなわち人間のあり方）に関する思考を中心にしてきた儒教のイデオロギーを強固に身につけていた玉虫や村垣の

ほうが、逆に文化の異質性に対してはるかに敏感な反応を示しているのは、理由のないことではない。あるいはまた佐野が、出自から見ても当時の地位・教養から見ても質的にさほどの大差はないと思われる福沢⁽¹¹⁹⁾からも分け隔てられてしまった要因は、「政治の考えというものは少しもない」⁽¹²⁰⁾などと言いながら、その反面「封建の門閥制度」は「親の敵」⁽¹²¹⁾だとして後年尖鋭に展開する封建制批判を準備してゆく、どちらかといえばイデオロギー憎悪の傾向が強い福沢と、日記で見るかぎりただ単にイデオロギー意識が希薄になり、むしろ封建制が忘却の彼方に追いやられてゆく感さえする佐野との、政治・社会ないしイデオロギーに対する資質・態度の相違にあるのかもしれない(ただし福沢の後年における回想と佐野のその場における日記のみを比べるのは不公平であろうが)。

結局、佐野がこのアメリカ渡航の体験によって得たものは何だったのであろうか。日記の記述を見るかぎり、彼がアメリカないし西洋や日本について従来とは違った何か新しいイメージなり視座なりを獲得したとはとても思われな⁽¹²²⁾い。ただ西洋の科学・技術に対する実際の関心が以前に増して拡大したことだけは確かであろうが、結局は「異文化の衝撃」らしきものはほとんど全く受けないまま帰国してしまうように思われる。

もっとも佐野は、ほんとうに政治・社会に対する関心が希薄になっていたのではなく、それとそれから派生するアメリカないし日本についての思考をすべて日記に書かず⁽¹²³⁾に隠していたという可能性があることは、注意されてよい。玉虫でさえ公表を憚る部分は「秘書」(巻八)としかく⁽¹²⁴⁾らいであるから(ただし玉虫は、「秘書」巻八の記事のうち、使節団自体を批判したものを除けばほとんど日記本文中に批判のトーンは劣⁽¹²⁵⁾るとしても同趣旨のさわりともいうべき記述をしており、しかも彼の最も重要な記述であるサンフランシスコ出航時の点呼における記事は、巻八よりもむしろ日記本文中のもののほうが批判意識が強かったことは十分に注意されなければならない)、雇われて藩の要職を占

めつつある佐野が、現体制の批判につながるような政治・社会に対する考察や関心を藩主に提示するのをためらったことはありうると十分に考えられよう。しかし、たとえそうだとしても、結論は同じである。イデオロギー色を不鮮明にし政治・社会について無関心でいることあるいはそう装うことは、逆にあらゆるイデオロギー・思想とこだわりなく結びつくことないしこだわりを隠して結びつくことを可能にし、それゆえどのような政治・社会体制の下においてもそこに適応して有効かつ有用な役割を果たす行動様式と価値観の保持を保証する⁽¹²⁾。すなわち佐野は、幕末当時の徳川幕藩体制下においても、また明治新政府にかぎらず来たるべきどんな新体制下においても、それが「西洋技術」の導入を許容するかぎり、最良の技術官僚もしくは科学技術者として、いつでもその職務を遂行しつづけることが可能な資質を身に備えているのである。

(1) 佐野の通称「貞助」は「貞輔」とも書き、また実名は「^{かなえ}新」だという。なお、以下佐野の略歴については、斎藤哲夫「佐野鼎先生年譜」(『開成会会報』復刊一一号、一九六五年、開成学園)に準拠し、かつ次のものを参照した(ただし各々の記載内容にかなり異同がある)。長田富作・日置謙「佐野鼎小伝」(佐野鼎『万延元年訪米日記』、一九四六年、金沢文化協会)。水上一久「万延訪米の加賀藩士佐野鼎について——サー・アーネスト・サトウと加賀藩——」(『北陸史学』創刊号、一九五三年、北陸史学会)。芳井光一編『石川県大百科事典』(一九七五年、北国出版社)。『石川県史』第三編(一九四〇年、石川県)。田村寿「建学の父佐野鼎先生略伝」(『開成学園九十年史』、一九六一年、開成学園)。

なお、佐野鼎の略歴(へむすびにかえて)の注7に記す佐野の後半生を含む)の詳細については、谷澤尚一氏の調査研究に依拠し、文献資料を補充したものである。ここに記して謝意を表す。

(2) 佐野が長崎に遊学したことについては、注1に掲げた文献のうち斎藤哲夫「佐野鼎先生年譜」に「幕府による第一回の海軍伝習に参加し、蒸気船の製造、運用術、航海測量学、洋式砲術等を直接オランダ海軍教官より学ぶ」(四五頁)と触れられているのみである。ところで、佐野自身が『万延元年訪米日記』(一九四六年、金沢文化協会。以下『訪米日記』)とのみ略記する。また引用に際して漢字の字体、変体・合成仮名、割注の表記等を適宜改めた個所がある)の中で長崎遊学につい

て触れているところが三ヶ所ある。その一は、暴風雨に遭った際にかつての経験を回想して、「僕先年長崎に遊びし時、薩州侯より献納せる昌平丸といへる軍艦にて、品川より遠州灘に至り一夜暴風に会ひ……」(一月二七日、五頁)。その二は、サンフランシスコにおいて咸臨丸で渡航した佐々倉桐太郎に会った際に、「僕は此の人と旧知己なり。先年長崎表初回の蘭人伝習の時昌平丸に同船し、崎陽にても暫く俱に逗留せり」(三月九日、一二頁)。その三は、同じく咸臨丸乗員の菊太郎なる人物に出会った際に、「彼も又前年長崎初回の伝習のとき同船せるものにて……」(三月二日、二三頁)。昌平丸は第一回海軍伝習生のうち幕府からの参加者の過半数を江戸から長崎に送った船であるから、佐野はそれに随伴して長崎に赴いたようである。そこで、文倉平次郎『幕末軍艦咸臨丸』(一九三八年、巖松堂)に掲載されているこの時昌平丸に乗船した伝習生の名簿を見ると、「下曾根金三郎・下曾根次郎助」の名が見え、さらに「下曾根次郎助内侍」として二人の名が書かれた後に「草履取貞助」とある(二六～二八頁)から、この「草履取」が佐野のことだと思われる。つまり彼は、伝習生であつた恩師の子息に従者として随行したのである。ちなみに、遣米使節随行者中에서도海軍伝習生であつた者には、佐賀藩士の島東西八(本名本島喜八郎)・小池専次郎(本名小出千之助)・島内栄之助、および三河吉田(豊橋)藩士だが佐賀藩雇となつていた福村磯吉(本名福谷啓吉)がいる(『万延元年遣米使節史料集成』〔全七巻、一九六〇～六一年、風間書房、以下『集成』とのみ略記し巻数を記す〕第七巻、二五～二七頁、参照)。

- (3) 壮猶館の前身は藩士大橋作之進が私邸に設けた砲術・化学の研究所(設立年不明)に始まり、一八五三(嘉永六)年に藩庁に移管されて「西洋流火術方役所」となり、大橋が中心となつて人材登用を行った。その翌年に壮猶館と改称され、教育機関として出発したわけである。その機構としては、火術方・測量方・製薬方・翻訳方・鑄造方・含密方・会読方等々が置かれた(岩崎鐵志「高島流砲術の伝播と展開——金沢藩壮猶館の場合——」、中山茂編『幕末の洋学』、一九八四年、ミネルヴァ書房、一一三～一一五頁)。

- (4) この岡田の建議は一八五七(安政四)年八月になされたもので、西洋砲術の利益、軍艦建造・西洋學術の振興の必要等を述べたものだが、その第二段で彼は、近い将来加賀藩が佐渡・能登近海における異国船防禦の職務を幕府から命じられることを予想して軍艦建造の必要を説いたあと、次のように佐野の招聘を進言している。洋学者としての佐野に対する評価と当時の洋学に対する認識の一端を示しているので引用してみよう。

「……軍艦之儀者一艘にも莫大之御入用も相懸り可中に付、御用途之御都合も可有御座御事と存上候間、是等之所は先指

置候ても、前文之如く万一御持場抔来り申候時は、指向夫々之御役人不足可仕哉。先第一、西洋火術御關無御座ては相成中間敷所、其教授方之役不足仕候。次に航海術者在合不申候。第三和漢之兵法は、有沢両家も御座候に付、御事欠には有御座間敷候得共、所謂兵法にも知彼知己不申ては勝算相立中間敷所、異国兵法講候者無御座候。第四には天文・測量・地理之学者在合不申候。是等之役々は当今之時節、御政事之上に於て在合不申ては難叶役者歟と奉存候所、頗る御欠事に相成居申様に存上候間、追々漸以て是等之役々御取立、器用なる者には夫々稽古も被仰付、或者他国人にても有名之者は被召出、夫々御揃置有御座度御事に存上候。然るに近年高島五郎・杉山大吾を初、有名之蘭学・兵法・炮術者抔、追々諸家方へも被召出、當時に而者村田藏六・佐野鼎抔僅一兩人残罷在候得共、是以今明年之内には、必徳嶋様・薩州侯抔へ必可被召出哉之取沙汰に御座候。先是等之兩人を省候而、其跡へ出候者は無御座哉に承及申候間、此兩人抔は先御召抱置御座候はゞ可御宜敷哉に奉存候。村田藏六儀は蘭学者に而兵法を講、並軍艦之儀は別而功者之由に御座候。佐野鼎儀は火術に而、下曾根家塾頭いたし罷在、長崎表へも罷越、蘭人相伝之由に御座候。〔下略〕〔『加賀藩史料』藩末篇上巻、一九五八年、覆刻一九八〇年、清文堂、九〇五頁。ただし、村田藏六〔大村益次郎〕はすでにこの前年に宇和島藩医から幕府蕃書調所の教授手伝になっているから、右文中の村田が未仕官であるとの認識がいかなる根拠に基づくものかは不明である。〕

(5) 斎藤哲夫、前掲論文、四五頁、および水上一久、前掲論文、三〇四頁。なお、水野は当初遣米使節に内定していた人物である。〔はじめに〕の注4参照。

(6) 佐野が一八六二(文久二)年に遣欧使節に随行した際の書簡が全部で九通残っている(金沢市立図書館蔵「佐野鼎欧行通信」)が、そのうち四通は手塚律蔵に宛てたものである(以上谷澤尚一氏の調査に基づく。なお九通のうち手塚宛の四通を含む六通は、日本史籍協会編『夷匪入港録』第一〔一九三〇年、覆刻一九六七年、東京大学出版会〕に収められ、同書に未収録の三通は前掲「佐野鼎小伝」に部分的に引用されている)。「佐野鼎小伝」によれば、手塚は佐野の江戸留守宅を世話していたという。手塚律蔵は一八二三(文政六)年周防国熊毛郡に生まれ、長崎で高島秋帆(高島流洋式砲術の祖)に兵学を学び、またシーボルトや江戸の坪井信道にも学んだ。一八五一(嘉永四)年、下総佐倉藩主堀田正睦に仕え、江戸藩邸で蘭学・英学を講じ、同藩の兵制改革を助けた。この頃の門下生に西周がいる(なお、一八五三〔嘉永六〕年に金沢藩の「西洋流火術方役所」〔注3参照〕に招聘されているようだが〔岩崎鐵志、前掲論文、一一四頁〕、経緯の詳細は不明)。そして一八五六(安政三)年、幕府蕃書調所の教授方となった。しかし一八六二(文久二)年、指導していた長州藩邸内の洋学研究

会で開国論を唱えて同藩士に襲撃された。以後後難を恐れて佐倉に移り瀬脇寿人と改名して、佐倉藩洋学校教授総裁を勤めた。明治維新後は外務省に出仕、また『読売新聞』の創刊にも参加している。一八七八(明治一一)年死去。

- (7) 前掲『加賀藩史料』藩末篇上巻、一〇九七～一〇九八頁。および前掲「佐野鼎小伝」、一九七～一九九頁。なお借用した金百両は帰国後下賜されたことに変更されている。

- (8) 佐藤昌介『洋学史研究序説』、一九六四年、岩波書店、一二二、一二五、一二七および三五七頁。

- (9) 同右、三五七頁。

- (10) 同右、二九六頁。「蚕社の獄」の全体像については同書第二篇で詳しく分析されている。

- (11) 同右、三五六頁。

- (12) 村上陽一郎『日本近代科学の歩み』、一九七七年、三省堂、一一三頁。

- (13) 佐藤昌介「国際的環境と洋学の軍事科学化」、中山茂編、前掲書、二三頁。

- (14) 遠山茂樹「維新の変革と近代的知識人の誕生」、『近代日本思想史講座4 知識人の生成と役割』、一九五九年、筑摩書房、一六六～一六七頁。

- (15) 教授された学科としては、航海・造船・測量・砲術、基礎学科として物理学・化学・数学、および軍医養成目的の医学があった(広重徹『科学の社会史——近代日本の科学体制——』、一九七三年、中央公論社、二〇頁。および村上陽一郎『日本人と近代科学』、一九八〇年、新曜社、九〇頁、参照)。

- (16) 教授された学科は徐々に増加し、一八六三年頃には蘭英仏独露各語学・天文学・地理学・物理学・数学・物産学・化学・器械学・製図学等に及んでいたという(村上陽一郎、前掲『日本人と近代科学』、八五頁)。なお、「蕃書調所」はさらに一八六二年「洋書調所」、六三年「開成所」と改称された。

- (17) そもそも「科学と技術は結びつき難い別々の伝統であった」が(坂本賢三「技術の発生と展開」、『新岩波講座哲学8 技術・魔術・科学』、一九八六年、岩波書店、六～七頁)、革命時のフランスに設置されたエコール・ポリテクニーク〔高等理工科学学校〕を出発点として両者の一体化がはかられ、「技術の基礎としての科学、科学の応用としての技術という関係が成立」し、科学による「再編成と方向づけ」によって技術が学問化されて「工学」(『科学技術』が成立することとなる(中山茂『歴史としての学問』、一九七四年、中央公論社、二〇一～二〇二頁、二〇四頁。なおフランス革命後の科学技術教育

については、F・A・ハイエク『科学による反革命——理性の濫用——』佐藤茂行訳、一九七九年、木鐸社、一五九～一六五頁、参照。なお注97参照。したがって、幕末の日本が導入した西欧の科学・技術は、技術偏重のものといえども科学と一体化されたものであり、むしろ各々の伝統にさえぎられて一体化の道が必ずしも平坦ではなかった西欧よりも、逆に当初より一体化したものであるとして受容した以後の日本において一早く科学技術の概念が成立したといわれる（坂本、同前、七～八頁。なお、中山、同前、二一～二二頁、参照。なお次注参照）。

- (18) 「科学の制度化」とは、科学（自然科学）が社会において一つの制度として定着していくことをいい、産業革命およびフランス革命を経た一九世紀の西欧において確立していった。その具体的な過程は、科学・技術の教育機関・教育制度の確立、専門分化の進行、科学者の専門職業化（まずは教育機関の教師として）、技術との融合による応用科学ないし科学技術（工学）の成立（注17参照）、産業および軍事（富国強兵）との密接な結合の発生などである（広重徹、前掲書、第二章、および中山茂、前掲書、第五章。なお、吉田忠「科学の自立と制度化」、前掲『新岩波講座哲学8』所収、参照）。また、この過程において科学の内容自体が著しく合理化・体系化され、客観的ルールと訓練法が確立（「教科書化」）されて、「誰もが一定の知識と手順・方法を教えられれば扱えるようなもの」となることによって、「特定の歴史的・文化的伝統や世界観と結びつく必要」をなくし、西欧のそれらでさえも「払い落とし」て、科学はどこへでも「普遍的に伝達可能な形」のものとなったのである。幕末以後の日本が受容したのも、もちろんこのような「制度化」という変容を成し遂げつつあった西欧近代科学だったのである（広重徹、前掲書、一五～一六頁、八二頁、および広重徹「科学における近代と現代」、同『近代科学再考』、一九七九年、朝日新聞社、三四～四八頁。なお、辻哲夫『日本の科学思想』、一九七三年、中央公論社、一九～二二頁、参照）。

- (19) 沼田次郎『洋学伝来の歴史』、一九六〇年、至文堂、二〇三～二〇五頁。なお、遠山茂樹『明治維新』、一九五一年、改版一九七二年、岩波書店、二九五頁、参照。

- (20) 丸山真男「開国」、日高六郎編『現代日本思想大系34 近代主義』、一九六四年、筑摩書房、二八六～二八七頁、二九〇頁。

- (21) 木村玄熊「肥後最初の洋行者木村鉄太と其の航米記に就て」（『九州日日新聞』一九三九年八月一〇日～一二日掲載）、松本雅明「肥後藩士木村鉄太の『航米記』について」所引、木村鉄太『航米記』（一九七四年、青潮社）解題、二三頁。

- (22) その一例としては、注4に引用した佐野鼎招聘の建議書を参照。

(23) 遠山茂樹、前掲論文、一六七頁。ちなみにその最初の教授陣の名と所属藩を掲げておくと、教授職——箕作阮甫(津山)・杉田成卿(小浜)、教授手伝——高島五郎(徳島)・松木弘安(薩摩)・東条英庵(長州)・原田敬策(備中浪人)・手塚律蔵(佐倉)・川本幸民(三田)・田島順輔(安中)・村田蔵六(宇和島)・木村軍太郎(佐倉)・市川斎宮(越前)である。また後に教授方となった杉享二は庶民の出身であり、津田真道(津山)と西周(津和野)は脱藩者である。

(24) 菊地久「維新の変革と幕臣の系譜…改革派勢力を中心に——国家形成と忠誠の転移相克——」(四)、『北大法学論集』第三巻第二号、一九八〇年、一五七〜一五八頁。ちなみに箕作は津山藩、福沢は中津藩、福地は長崎の医家出身である。

(25) 同右、一六四〜一六五頁。

(26) 園田英弘「幕末海防と文明——共有世界の形成と展開——」、林屋辰三郎編『幕末文化の研究』、一九七八年、岩波書店、一一一頁。

(27) 沼田次郎、前掲書、二〇四〜二〇五頁。なお、このような状況下で、「民間の蘭学塾も、いわば幕府ないし諸藩の家臣の留学生収容所、あるいは仕官候補者の養成所となった」といわれる(遠山茂樹、前掲論文、一六七頁)。

(28) 菊地久、前掲論文(四)、『北大法学論集』第三二巻第一号、一九八一年、一七一頁。もう一つの類型は、尊攘派に代表される「政治短絡型」である。なお菊地氏は、「制度的上昇の志向性」の例として、後述する福地源一郎の場合と、開成所の教授職にありながらそれでは「出世が遅い」として陸軍に転じた大鳥圭介の場合をあげている(同、一七二〜一七三頁)。

(29) 遠山茂樹、前掲論文、一六八頁。

(30) 園田英弘、前掲論文、一一一頁。

(31) 福地源一郎「懷往事談」、『明治文学全集11 福地桜痴集』、一九六六年、筑摩書房、二九三頁。なお、福地は福沢諭吉・松木弘安(寺島宗則)らとともに、この遣欧使節団が組織的行った「探索」(へはじめに)の注11参照)においてその実務を担当していた。なお、注41にあげる福沢らの場合を参照のこと。

(32) 菊地久、前掲論文(五)、一七二頁、参照。

(33) 遠山茂樹、前掲論文、一六九頁。その数少ない例外としては、橋本左内・村田蔵六・松木弘安らがあげられている(同上)。

(34) 福沢諭吉「西洋事情 初編」巻之一、小引、『福沢諭吉選集』(全一四巻、一九八〇〜八一年、岩波書店)第一巻、一〇

○頁。

(35) たとえば加藤弘之は一八六一年に『隣草』を著して立憲政体を紹介し、西周と津田真道は一八六三～六五年にオランダへ留学して法学・経済学を学んでいる。

(36) 沼田次郎『幕末洋学史』、一九五一年、刀江書院、二六九頁。

(37) 佐藤昌介、前掲書、一三九頁。および遠山茂樹、前掲書、二九五頁、参照。なお、このような状況は、幕府・反幕諸藩のいずれにおいても「根本的な性格は等しいと見なければならぬ」とされる(沼田次郎、前掲『幕末洋学史』、二六九～二七〇頁)。

(38) 福沢諭吉「長州再征に関する建白書」、前掲『福沢諭吉選集』第一巻、九七頁、および同「福沢英之助宛書簡」、同、第一三巻、二九頁。なお、遠山茂樹、前掲論文、一六九～一七〇頁、参照。

(39) 福沢諭吉『新訂 福翁自伝』、一九七八年、岩波文庫、一八七頁。そこで福沢はこう述べている。「江戸に来て徳川の幕府に雇われたからと言ったところが、これはいわば筆執る翻訳の職人で、政治に与かろう訳けもない。ただ職人の積りでいるのだから、政治の考えというものは少しもない」。なお、ここでいう「政治の考え」とは、政治思想・知識という意味ではなく、権力抗争への参加ないし自らが政治家になる、という意味にとるべきであろう。現に彼はひかえめながら「私に全く政治思想のないではない」として当時彼がドイツ連邦流に幕藩制を改造する意見を持っていたことを述べているし(同上、一八一頁。これにつづけて注41に引用する一文がある)、また「大君のモナルキ」による封建制徹底の建言(注38参照)という具体例もある。しかし、だからといって彼はその実現のために何らかの実践的行動をとったわけではなく、戊辰戦争のさなか、しかも上野の山での大戦乱の真只中でも「此方に関係がなければ怖いこともない」とばかりに、芝新銭座の自塾で平常通りの授業を続けていたのである(同上、二〇二頁)。

(40) 村上陽一郎、前掲『日本人と近代科学』、三〇頁。

(41) このような洋学者の立場と意識は、福沢が回想する「文久二年欧行の船中」(遣欧使節随行の時)で松木弘安・箕作秋坪との三人でしたとする次のような話に、よく表されている。「それから段々身の上話に及んで『今日吾々共の思う通りを言え、正米を年に二百俵貰うて親玉(將軍の事)の御師匠番になって、思うように文明開国の説を吹き込んで大変革をさしてみたい』と言うと、松木が手を拍って『そうだそうだ、これは遣ってみたい』と言ったのは、松木の功名心もその時には二

百俵の米を貰うて將軍に文明説を吹き込むぐらいのことで、当時の洋学者の考えは大抵みな大同小異、一身のために大きなことは考えない」(前掲『福翁自伝』、一八一頁)。福沢は『自伝』中でしばしば当時の自分に「立身出世」の意欲がなかったことを述べているが、右の引用文を見るかぎり、「文明開国」のためとはいえ二百俵取りで將軍の「御師匠番」になるぐらいの「制度的上昇の志向性」が彼にもあったのである。

- (42) 福沢は遣欧使節からの帰国後、たとえば手塚律蔵が尊攘派に襲撃されるなどして(注6参照)「いよ／＼洋学者の身が甚だ危くなって来て油断がならぬ」という状況になった時、「マア／＼言語挙動を柔らかにして決して人に逆らわないように、社会の利害というようなことはまず気の知れない人には言わないようにして、慎めるだけ自分の身を慎んで、ソレと同じ時に私はもっぱら著書翻訳のことを始めた」としている(前掲『福翁自伝』、一四〇頁)。なお注39参照。

- (43) 福沢諭吉、前掲『福翁自伝』、一九六頁。なお注39参照。

- (44) 菊地久、前掲論文(七)、『北大法学論集』第三三巻第五号、一九八三年、一六頁および二〇頁。なお沼田次郎、前掲『幕末洋学史』、二七〇頁、および遠山茂樹、前掲書、二九五頁、参照。ただし、このように新政府の官僚に転身しても、後にその藩閥政府内での「制度的上昇」を期待できずに不遇感を持ちたり、あるいは飛躍的に増大する新知識・新技術に追いつけずに取り残されたりして、結局官界を離脱して教育・言論等に転身するものが多くなったという(菊地久、前掲論文(六)、『北大法学論集』第三三巻第三号、一九八一年、一七〜一八頁)。ちなみに、佐野鼎は幕府の雇いにこそならず加賀藩に仕えたままだったが、維新後は兵部省の官僚となり、しかし約一年で教育界へ転身している(佐野の後半生についてはへむすびにかえての注7で詳述する)。

- (45) 『訪米日記』、一月二二日、四頁。

- (46) 同右、二月一四日、一〇〜一一頁。

- (47) 同右、閏三月七日、三八〜三九頁。および、六月二二日、一二六頁。

- (48) 同右、閏三月七日、三七〜三八頁。一行はこの前日に外輪船のポーハタン号から新鋭のスクリュー船ロアノーク号に移乗しているため、このような記述がなされたのだが、玉虫はほとんどスクリューがあるという事実のみを記録しているにすぎない(玉虫左太夫「航米日録」、『日本思想大系66 西洋見聞集』、一九七四年、岩波書店〔以下「航米日録」とのみ略記する〕、八〇頁)。

(49) 『訪米日記』、六月一九日、一二三～一二四頁。これは、帰路途上ナイアガラ号において水不足に悩まされたことから、ロアノーク号にはこのような機械があったことに言及したものである。

(50) 同右、六月三〇日、一二九頁。

(51) 同右、閏三月三日、三二頁。ただし、すれ違う英国船と応答があったことは、玉虫をはじめ他の人々も記している場合が多いのだが、応答の内容まで逐一記したものは佐野以外にはない。佐野と他の人々にこのような差が生じたのは、玉虫が「我等ハ言語通ゼザル故、何事タルヲ知ラズ」(『航米日録』、閏三月三日、七〇～七一頁)と記しているように、英語の理解力に差があったことも一因であろう(佐野の英語学習については後述)が、玉虫らも内容を知ろうと思えば佐野に聞けばよいわけだから(実際両者の間に知識の交流があったことも後述)、やはりとりわけこのような航海上の儀礼に注目する佐野の関心の在り方が大きな要因になっているといえよう。

(52) 『訪米日記』、七六～七七頁。なお佐野は、ワシントン滞在中のうち四月三日以降およびフィラデルフィアとニューヨーク滞在中は「種々の事件ありと雖ども、毎日日付を記すときは甚だ繁雜にして、無益に紙葉を費す故に、以後之を省くべし」(同、六〇頁)として、各日ごとに日付を入れての記述をせず、出来事(見学箇所と内容等)を羅列している(ボルチモアは滞在が一兩日だったため日付の省略はされていない)。したがって、以後このような箇所から引用する際には、日付を記すことができないため、頁数のみ記す。

(53) 同右、閏三月二九日、五六頁。もちろん鉄道・電信の構造そのものについて観察記録しているものは多数あるが、建設費まで掲げているものはない。むしろ佐野の記述は、鉄道についてはパナマで乗車した際にその構造を略述している(同、閏三月六日、三四～三五頁)が、電信についてはその構造を何も記していない(このことに関しては後述する)。なお、大西洋海底電線に関しては佐藤秀長も言及している(佐藤「米行日記」、四月一二日、『遣外使節日記纂輯』第一、一九二八年、日本史籍協会、四五四頁)が、その内容は噂話程度の不確かなもので、佐野とは比べものにならない。

(54) 『訪米日記』、閏三月二五日、四八頁。四月二〇日、六九～七〇頁。四月二二日、七六頁。四月二八日、九四～九五頁。玉虫をはじめ他の人々においては兵の種類(歩兵隊・騎兵隊・小砲隊等)と人数が記されることは多く、かえって佐野より詳しい場合もあるが、礼式(抜刀・捧銃等)や行軍様式(縦隊・横隊等)については略述的ではあるが佐野のものが唯一であるかとも詳細だといえる。

- (55) たとえば玉虫左太夫「航米日録」、四月九日、一〇二頁を参照。
- (56) 『訪米日記』、六二～六三頁。なお、佐野自身は司令官から聞いた話の内容を記していないが、佐藤秀長が佐野と共に海軍造船所を見学したと記し、その司令官から聞いた話の内容を書き留めている(前掲「米行日記」、四月一日、四五五～四五六頁。ただし佐藤は見学した兵器工場については何も記していない)。
- (57) 松沢弘陽「さまざまな西洋見聞」、前掲『日本思想大系 66 西洋見聞集』、解説、六二四～六二五頁。および、同「西洋『探索』と中国」(『北大法学論集』第二九卷第三・四合併号、一九七九年、一五九頁。
- (58) “The Philadelphia Inquirer”, June 14, 1860. 『集成』六、一七九～一八一頁。なお、この造幣局における貨幣分析の模様については Patterson DuBois: The Great Japanese Embassy of 1860—a forgotten chapter in the history of international amity and commerce——(in, C. Shibana, ed.; “The First Japanese Embassy to the United States of America”, 1920, Tokyo, The America-Japan Society) に詳しい。
- (59) 『訪米日記』、七九～八四頁。
- (60) 同右、一三二～一三五頁。なお「ボウデッチ」はアメリカの数学者・天文学者 Nathaniel Bowditch (1773-1838) 「航海書」とは“The New American Practical Navigator” (1802) とのことで(玉虫「航米日録」、補注、五四七頁)。
- (61) 「航米日録」巻八、二四三～二四五頁。および同、七月一日、一八一～一八三頁。
- (62) 同右、七月二九日、一八七～一八九頁。
- (63) 同右、六月一日、一六九～一七〇頁。
- (64) 同右、補注、五四七頁、参照。
- (65) 「航米日録」、三五～四三頁(ハワイ)、五四～六三頁(サンフランシスコ)、七四～七九頁(パナマ)、一〇九～一一八頁(ワシントン)、一二〇～一二二頁(ボルネオ)、一二七～一三〇頁(フィラデルフィア)、一三九～一四四頁(ニューヨーク)、一六三～一六五頁(セント・ヴィンセント島)、一七四～一七八頁(ロアンダ)、二〇一～二〇七頁(バタビア)、二一四～二一八頁(香港)。その他、ポート・ペロ港とハンプトン・ローズ港について「形勢」(八一～八二、九一～九二頁)および乗船した各船の「大略」(九一～一三、七九～八〇、九二～九三、一四四～一四五頁)などを別記している。
- (66) 同右、一四五～一五八頁。なお「花旗国」とはアメリカ合州国のこと。

(67) 『訪米日記』、一五〇一七頁（ハワイ）、七一〇七四頁（ボルチモア）、八四〇九三頁（フィラデルフィア）、九八〇一〇九頁（ニューヨーク）、一一六〇一二〇頁（セント・ヴィンセント島）、一二七〇一二八頁（ロアンダ）、一四九〇一五二頁（バタビア）、一六三〇一六五頁（香港）。

(68) 前注に掲げた記事のうち、ハワイを除いては「以上の説明は地理誌より訳出する所なり」とか「……に就きての記載あり。次の如し」というようにその全文が引用であることを明記している（ボルチモアについては「詳説左の如し」としているだけだが、これも全文が引用であることはまちがいない）。ニューヨークについては後述するように小出千之助が訳したものであることが明らかだから、それ以外の「地誌」も小出から得たものである可能性はきわめて高いだろう。またハワイの「地誌」には何も注記されていないが、これも少なくとも地理書からの引用を交えた記述であることはまちがいない。

(69) 『訪米日記』、九五頁。なお、「航米日録」の補注（五四六頁）によれば、この小出から得たとする佐野の「地誌」と同趣旨の文章を玉虫も訳書から得た知識として記しており（「航米日録」、一四〇頁）、玉虫もこれを小出から得たのではないかと推測されている（また小出の訳は蘭書からの翻訳ではないかとも推測されている）。そうであれば「同志的」グループの中で、地理書の翻訳・知識提供においては小出が中心的役割を果たしていたとも思われる。

(70) 同右、七六頁。

(71) もっともこれは玉虫のほうが特異な例なのであって、他の随行者達が佐野のような「地誌」さえほとんど付さず、あってもせいぜい日記本文中に書物から得た知識を簡略に記載する程度（たとえば木村鉄太）なのに比べれば、佐野の日記ははるかに充実しているというべきなのであろうが。

(72) 二月一五日付ハワイより帰山仙之助宛書簡、『集成』七、二〇一頁（前掲「佐野鼎小伝」、一八二頁にも引用あり）。なお「ウヲート」は宣教師 Henry Wood である。

(73) 三月八日付サンフランシスコより帰山仙之助宛書簡、『集成』七、二〇二頁。なお前掲「佐野鼎小伝」、一八二頁にも引用があり、そこでは「五ツ半」は「五時」、「日より」（原文「日々」）は「日々」、「充」は「宛」となっている。

(74) なお、この英語学習については、佐野の日記本文中には一切記されていない。

(75) 前掲、二月一五日付書簡。ただし、この感想も日記本文には記されていない。

(76) 『訪米日記』、一月二七日、六頁。この文は二七日付の個所に記されているが、読めばわかるように一夜明けた二八日

朝の出来事が記されているのである。

(77) 同右、三月一八日、二七～二八頁。

(78) 『集成』七、二八頁。

(79) 『訪米日記』、三月一日、二三～二四頁。

(80) しかし、佐野が例外的に「夷狄」という言葉を使用しているところが一個所だけある。それはアフリカ・ロアンダの「地誌」において、ロアンダの人々の現況を記したあと、「これを夷狄といふも可なるべし」(『訪米日記』、一二八頁)と述べているものである。注68で述べたように、この「地誌」は「友人」(小出千之助)が訳したものの引用であるらしいから、この「夷狄」も「友人」が何かの訳語として使ったか彼自身の感想を入れてしまったのかもしれないが、その場合でも佐野がどんな夷狄意識ももたず「夷狄」という言葉を使わない主義の人ならば用語を変えることは可能だから、やはりここには彼の意志が入っているというべきであろうし、あるいは佐野自身が自らの見聞の感想を引用の最後に入れてしまった可能性もあるだろう。いずれにせよ、一見完全に克服されているかに見える佐野の夷狄意識が姿を変えて新たな対象に転嫁されていることが充分にありうるし、そうだとすれば、後述するように彼の夷狄意識が自覚的に克服されていたわけではならしいことの一証例となるであろう。

また、夷狄意識が他に転嫁される事例としては、福島義言の場合がある。彼は、アヘン戦争以来の中英間紛争において中国側の残虐非道な行為が絶えないため西洋人が中国を「輕蔑スルコト、亜仏利加ノ黒鬼ヨリモ甚シ」く「無礼無仁ノ夷狄」と称しているのを「後車ノ戒」にしなければならぬとしたうえで、西洋人は「外国人ヲ恵ミ、親コト一族ノ如」くであり、中でもアメリカ人は「人質殊ニ温和」かつ「正直」で、「高官」は「猥ニ下人ヲ侮」ったり「己カ權威ヲ振フコト」はなく「平人」も「高官ニ誦フコト」がなく、「国富、民泰ニ、枕ヲ泰山ノ安ニ置ク」という状態になっているとして、「此度日本ノ使節従者総計七十七人、大抵ハ彼ヲ憤リ悪ノ士ナリ、然ト雖、其実ヲ知ニ及ンテハ、各先非ヲ悔タリ」とアメリカ(西洋)に対する夷狄意識を反省している(福島義言「花旗航海日誌」、四月五日、『集成』三、三三三～三三四頁。なお松沢弘陽、前掲「西洋『探索』と中国」(一)、一四七頁、参照)。ここでは、西洋に對する夷狄意識は反省されているものの、今や「華夷」の図式そのものが転倒してしまい(中国が「夷狄」!)、「夷狄」「礼」「仁」といった言葉を使用する価値基準が、西洋人が使い認めうるものに変換されてしまっているらしいのである(また福島のこの記述は、彼の日記全体から見

れば、このような感想を得る根拠となるアメリカ人および中国人に対する彼自身の観察が他にほとんどないために非常に唐突なものに見え、したがって玉虫的なアメリカ人評価のポイントはあるものの、文化の異質性に対する意識としてもいまだ表面的な第一印象(第一章2参照)のみに基づいた非常に不十分なものの感をぬぐえない)。なお、「華夷思想の解体とものにあらわれ……華夷の図式の余響をひく」観念に関しては、植手通有「対外観の転回」、橋川文三・松本三之介編『近代日本政治思想史I』、一九七一年、有斐閣、五八～五九頁。

(81) その他たとえば玉虫―佐野と比べると「夷語」―「英語」―「胡楽」―「彼の邦音」といった例がある。

(82) 実際、玉虫はたいいていの場合「花旗国」「花旗人」等と表記し、村垣でさえ普通は「合衆国」「米人」等と表記している。また強固な夷狄観を持っていたかどうかはともかく佐藤秀長をはじめ「夷」に類する用語をほとんど全く使わない人は他にいくらかいる。付け加えるならば、玉虫がハワイで中国人と筆談した際にイギリス・アメリカを「夷」と称したとしてこれら諸国の機嫌を損じることを憚った使節上層部から叱責された例(『航米日録』巻八、二二九頁。なお第二章の注50参照)もあるから、あるいは中にはこのような経緯から「夷」の使用をさしひかえた者もあるかもしれない。

(83) 『訪米日記』、閏三月四日、三二頁。

(84) 同右、閏三月九日、四〇頁。

(85) 村垣範正「遣米使日記」、閏三月一六日、前掲『遣外使節日記纂輯』第二、六九頁。なお第一章の注34参照。

(86) 佐野が記している日本人の病者に水葬のことを聞かせないという件は、他の人々の記述には一切出て来ないから、それが佐野の個人的意志による行動なのか、あるいは使節団全体の統一的意志によるものなのか、わからない。しかし、たとえ後者だとしても、佐野だけがこの件を記していることは、やはり彼だけが持つ特別な心配り(これも航海上の一知識なのかもしれない)を示しているといえよう。

(87) 実際佐野は、この二年後文久遣欧使節に随行した時には、『論語』を引用した漢詩を作っている。前掲「佐野鼎小伝」、一九五頁。

(88) なお、注80を参照。

(89) 自然科学・技術に見られるイデオロギー性の「稀薄性」および「中立性」については、戸坂潤『技術の哲学』、『戸坂潤全集』第一巻、一九六六年、勁草書房、二六八～二八六頁、参照。および注97参照。

(90) 軍事訓練は、玉虫の日記によるとポーハタン号上だけでも三月一・三・七・八・二三・二七・二八日、閏三月一・二日に様々な型(同一の訓練がくり返されているのではない)で行われているが、佐野はいずれについても全く記録していない。もっとも玉虫はこれらの訓練が行われた時刻を「巳」(午前一〇時頃)ないし「申」(午後四時頃)と記している場合が多く、それは佐野が英語学習に当てているという時間とちょうど重なる。しかも軍艦という性質上訓練の行われる時刻が一定に決められていることは十分に想像できるから、佐野が英語の勉強中であつたため、これらの訓練を一度も見ることがなかったといえないこともないであろう。しかしたとえそうであっても、洋兵学への関心が非常に強い彼なら、一度くらい休憩して訓練を見学してもよいではないか。

(91) 玉虫「航海日録」巻八、二二八頁。

(92) 『訪米日記』、一月二七日、五頁。

(93) 玉虫「航海日録」、閏三月九日、八二頁。

(94) 『訪米日記』、閏三月九日、四〇頁。

(95) 注97参照。

(96) 玉虫「航海日録」巻八「三月廿八日ノ事」、二三九〜二四〇頁。なお、第二章の注41を参照。

(97) 第一章の注74を参照。なお、F・A・ハイエクによれば、フランス革命後の科学技術教育(注17参照)によって「技術的専門家」という「新しい型の人間」が「歴史の中で初めて」出現し、その後各国に拡がって「この型の出現は……十九世紀後半から二十世紀にかけて、非常に重要となり、影響を及ぼすようになった……だがこの専門家は、社会とか社会生活、社会の成長、社会問題、社会の価値などの知識を殆ど、あるいは何ももっていないのである」とされる(前掲『科学による反革命』、一六〇頁)。したがって、佐野に見られる社会的関心の欠如という特徴は、世界的に見られる技術者の一般的特徴を示しているものだとも考えられよう。また「制度化された科学」における「社会性」の「欠乏或は稀薄」もつとに指摘されている(吉田忠、前掲「科学の自立と制度化」、二二四〜二二五頁)。実際、このようなとくに科学・技術者のもつ脱イデオロギー性、政治・社会に対する無関心といった特徴を、後に明治国家の支配者も認識し利用しようとした動きが見られる。すなわち伊藤博文は「教育議」(一八七九年、井上毅起草)において、漢学者流のイデオロギー・政治的関心の過多傾向(具体的には自由民権思想)を攻撃し、それを沈静さす方策をこう述べている。

「政談ノ徒過多ナルハ、国民ノ幸福ニ非ズ、今ノ勢ニ因ルトキハ、士人年少稍ヤ才アル者ハ、相競フテ政談ノ徒トナラントス。蓋シ現今ノ書生ハ、大抵漢学生徒ノ種子ニ出ヅ。漢学生徒往々ロヲ開ケバ輒チ政理ヲ説キ、臂ヲ攘ケテ天下ノ事ヲ論ズ。故ニ其軋ジテ洋書ヲ読ムニ及デ、亦静心研磨、節ヲ屈シテ百科ニ従事スルコト能ハズ、却テ欧州政学ノ余流ニ投ジ、軋タ空論ヲ喜ビ、滔々風ヲ成シ、政談ノ徒都鄙ニ充ルニ至ル。今其弊ヲ矯正スルハ、宜シク工芸技術百科ノ学ヲ広メ、子弟タル者ヲシテ高等ノ学ニ就カント欲スル者ハ、専ラ實用ヲ期シ、精微密察歲月ヲ積久シ、志嚮ヲ專一ニシ、而シテ浮薄激昂ノ習ヲ暗消セシムベシ。蓋シ科学ハ、実ニ政談ト消長ヲ相為ス者ナリ。」（『近代日本思想大系30 明治思想集I』、一九七六年、筑摩書房、二六七頁。なお、中山茂、前掲『歴史としての学問』、二五一頁、参照。）

(98) 『訪米日記』、閏三月二四日、四六〇四七頁。

(99) 玉虫「航米日録」、閏三月二五日「ハムローク港形勢」、九一〇九二頁。

(100) 「諸国建地草図」（『華山・長英論集』、一九七八年、岩波文庫）は一八三九（天保一〇）年、幕臣江川太郎左衛門が江戸湾防備に関する見分の復命書を作成するにあたって意見を求めた際に渡辺華山が提出したもので、一般に流布されたものではない。そこでは華山は、主要八ヶ国の首都を国防的見地から考察して「按ズルニ、万国建都形勢、皆山水ニ依ルト雖、唯大洋ヨリ大湾ニ達スルモノハ、控扼ノ要地アラザレバ、注海大川ノ便ヲ考、必奥地ニ都ヲ建ルモノト見ヘタリ」としたうえで、「国体外防ヲ専ニシテ、内防ヲ不顧ニ似タリト雖、外防ニ応ズル勢ヲ考、又内地ノ便モ次デ考フベシ」（同上、五二頁）と、「『外防』優先の論理」によって江戸湾の防備を構想したものである（佐藤昌介、前掲書、二七三〇二七四頁）。この華山の見解と玉虫が砲台の立地条件から下した評価（第二章5参照）とは基本的にきわめて類似している。

(101) 『訪米日記』、閏三月二八日、五四頁。

(102) ただし佐野は、使節がハワイ国王に謁見した時に随行し、その王宮について「王の居館は石垣を繞らせども、要害さまで厳にあらず。されども門内に大砲を備へ、歩卒に劍付銃を持たしめ、両側に配列して警護せしむ。これ外国一般の礼と見えたり」（『訪米日記』、二月一八日、一三頁）と記しているから、あるいはこの「外国一般」の中にホワイト・ハウスのことをも含めて書いてしまっているのかもしれない。

(103) 『訪米日記』、閏三月二八日、五四〇五五頁。

(104) なお、大統領の任期・再選とその制限については、玉虫もほぼ正確に記している（『航米日録』、一四七頁）。しかし佐野

は、玉虫にはない州名を逐一掲げるような知識を持っている(『訪米日記』、六六頁)にもかかわらず、玉虫にあった州知事選挙についての知識は持っていないようである。

- (105) 他に佐野は、使節一行の宿舎に妻子同伴でぶらりと現れた大統領を見て、「極めて簡易なるものなり」と記している(『訪米日記』、六八頁)。

- (106) 木村鉄太、前掲『航米記』、閏三月二八日、一六二および一六五頁。もっとも記録者によってはこの官名に異同があり、また木村自身にも誤解がないとはいえない(たとえば木村はこの式典における各高官の位置の見取図を書いているのだが、当然どこかに居なければならぬ国務長官の位置が明らかでない。また彼はこの前日に使節が訪問した先を国務長官ではなく副大統領と誤記している(同上、閏三月二七日、一六一頁)から正確なことはわからないが、少なくとも四人いたことにはまちがいないだろう。

- (107) 村垣範正、前掲「遣米使日記」、三月二八日、八九頁。

- (108) 『訪米日記』、六四〇六五頁。「栈敷」とは傍聴席のこと。なお、第二章の注73を参照。

- (109) たとえば佐野は、フィラデルフィアの「地誌」においてキリスト教各教派の名と教会数を記しているが(『訪米日記』、八八頁)、彼自身、の眼によるキリスト教や日曜礼拝についての観察は、それらが存在したという事実さえ日記全篇を通して一つもない。

- (110) 『訪米日記』、五月一二日、一一一頁。傍点は引用者。

- (111) 前掲『福翁自伝』、一一六頁。ルビは原文。ただし山口一夫氏によれば、この文中製糖所だけは福沢の記憶違いで、実際にそれを見学したのは一八六七(慶応三)年、二度目の渡米の時であるらしい(山口一夫『福沢諭吉の亜米利加体験』、一九八六年、福沢諭吉協会、一八三頁)。

- (112) たとえば、玉虫「航米日録」、一一五〇一一六頁、木村鉄太、前掲『航米記』、四月二六日、二〇七〇二〇九頁、佐藤秀長、前掲「米行日記」、四月一日、四五三〇四五四頁。

- (113) 『訪米日記』、閏三月二九日、五六頁。なお注53を参照。

- (114) 注17参照。

- (115) 広重徹、前掲『科学の社会史』、一五〇一六頁、八一頁、および同、前掲「科学における近代と現代」、四五〇四七頁。な

お注18を参照。

(116) 前掲『福翁自伝』、一一七頁。ルビは原文。

(117) また、辻本雅史氏によれば、一八六五(慶応元)年薩摩藩留学生としてイギリスに渡航した森有礼においても、当初は「富国強兵のための技術学を修むべく渡英した」のだが、「西欧の衝撃」によって西洋文明の基盤に「単に技術のみではなく、それを支える人間のあり方、つまりは日本と異質な文化の問題」があると認識し、「それを基礎とした国家や社会のあり方を意識しはじめ」たとされる(辻本雅史「森有礼の思想形成——近代国民教育の構想——」、『光華女子大学研究紀要』第三二集、一九八四年、一五～一九頁)。

(118) 事実福沢は、二年後の文久遣欧使節に随行するにあたり、明らかにこのサンフランシスコにおける「驚き」をふまえたうえで「外国の人に一番わかり易いことではほとんど字引に載せないというようなことが此方では一番六かしい。だから原書を調べてソレでわからないということだけをこの逗留中に調べておきたいものだ」と「事情探索の胸算」を立て、その結果が『西洋事情』に結実していったのである(前掲『福翁自伝』、一三二頁)。

(119) 福沢は一八三四(天保五)年、中津藩の下級士族(中小姓格、一三石二人扶持)の家に生れる。また一四、五歳頃から白石常人に師事して漢学を学び始め、本人は「一ト通り漢学者の前座くらいになっていた」(前掲『福翁自伝』、一六頁)というが、やはり当時の一般教養程度のものであったろう。そして一八五四(安政元)年、洋学を志して長崎に遊学、翌年大阪の緒方洪庵に入門、五七年には塾長を務め、五八年江戸築地の中津藩屋敷内に蘭学塾を開いた。

(120) 福沢、前掲『福翁自伝』、一八六頁。なお注39を参照。

(121) 同右、一四頁。

(122) またさらに玉虫日記の写本には、一般に流布している藩主上呈の七卷本(「秘書」巻八がないもの)以外に、この七卷本に浄書される以前の原形ともいべき「秘書」巻八の記事内容が日記本文に混入した形の写本も複数確認されており、この系統の写本も国内に相当流布していたのではないかと推定されている(宮地正人「玉虫左太夫の原『航米日録』について」、『日本歴史』一九八三年三月号、吉川弘文館、四九～五八頁)。

(123) 実際、明治以後の日本における科学・技術について、いかなる「非合理思想」とも「得手勝手な結びつきを許す」という「科学の無思想性」が指摘されている(花田圭介・梅沢博臣・静間良次「日本の科学と思想」、『近代日本思想史講座7 近

代化と伝統』、一九五九年、筑摩書房、二九〇～二九三頁。しかしこれはまた日本だけの特徴というよりもむしろ、「制度化」の過程において特定の世界観・価値観と結びつく必要をなくし、どこへでも移植可能となった（広重徹、前掲論文、四五～四七頁）という近代科学そのものに根ざした特徴（戦争協力は言うに及ばない）であると考えられよう。

むすびにかえて

こうして村垣範正・玉虫左太夫・佐野鼎らと共にしてきた長旅はひとまず終わるのだが、今一度三人のアメリカ体験の意味を総括してみることにしよう。

まず、遣米使節随行者たちにおけるアメリカ体験の第一段階というべきものは、アメリカ人が「親切」であるとか「勤勉」であるといった第一印象を持つことである。しかし、アメリカ人と日本人の違いが単にそのような人間の表面的な態度や性格の特徴に帰せられている間は、それは人間が本能的に持つ見知らぬものに対する心理（偏見）の問題であって、その奥に隠された意味にまで意識が及ばないうちは文化の異質性に関する問題にならないだろう。だから、もし「親切」「勤勉」といったアメリカ人に対する好意的評価（夷狄らしくない証拠の発見）の増大のみによって、文化の異質性についての理解（の試み）がほとんどないまま、夷狄観が「反省」ないし「訂正」されてしまう事例があるとするならば、それは異文化理解の問題ではなく、むしろ彼らの夷狄観の質——その觀念性・イデオロギー性の強弱（強固な儒教觀念を伴ったものから単なる人見知りに毛がはえた程度の偏見まで）およびその日本における変質（担い手が武士であることに基づく政治的・軍事的性格の優越、文化的優越意識の希薄性等）——の問題であるというほうが正しい（ただしこの問題について本稿ではほとんど考察することができなかったが）。したがって、こ

のような第一印象によるアメリカ（ないし西洋）イメージの転換は、たしかに偏見を除去することによってアメリカ（西洋）文化への関心をより容易に持ちやすいものにするかもしれないが、それだけでは一つのステロタイプが別のステロタイプに置き換えられたにすぎず、文化の異質性に対する「驚き」や理解（意識化）およびそれらを媒介とした自己の観念と日本の「過去」に対する自覚的働きかけは、あくまでこれ以後の問題に属するであろう。

さて村垣範正の場合は、明らかにこの第一段階を越えて、自己の文化的価値観に深く根ざした彼の行動様式が全く異質な文化的価値観に根ざした行動様式に直面した時に生じる心理的混乱状態（ベニツク）といういわゆる「カルチャー・ショック」^③を経験し、その中で異質な文化に対する「驚き」を十分に得ている。ところが、その「驚き」を自己の観念に引き寄せて解釈しようとする、いらだちや警戒心・不信感がつるばかりで、結局「カルチャー・ショック」の効果は「心理的な後退を生じて自己の内部にひきこもる」^④という消極的側面が圧倒的に優勢を占めることとなり、「驚き」を押えつけて異質な文化を拒絶してしまうのである。

村垣の「赤毛布」^{ゼット}ぶりを後世から嘲笑することは簡単である。従来開国期の一挿話として彼の日記が数多く取りあげられてきたのも、基本的にそのような観点からのものであったことは否めない。しかし注意すべきことは、村垣のような反応は、たしかに幕末維新期の西洋体験としては他に類を見ない特異な事例にはちがいがなく、異文化接触において必然的に起こってしかるべき反応であることは確かであり、したがって彼の日記は誰かによって書れなければならなかった開国期の一断章であることはまちがいないということである。それは単に、洋の東西を問わずどんな異文化接触においても、また過去・現在・未来を問わずどんな時代においても、彼のような資質の人、すなわち閉ざされた自己の観念（その内容はともかく）の中でのみ解釈しようとして結局は異質な文化をほとんど拒絶すること

しかできないという反応のパターンが類似した人が、潜在的ないし顕在的に存在するからという理由によるものではない(ただしこの理由からだけでも、現在の我々を含めた以後の日本人が、簡単に嘲笑できるほど村垣的資質を完全に過去の遺物とすることができているのかどうかは疑問である。それは今なおどこかでだれかが再生産しているものかもしれないのだ)。村垣の認識は、「ある方法と原理にもとづいた学問的な認識であつた」⁽⁵⁾といわれるように、儒教観念とそれを基軸にした徳川「鎖国」体制のイデオロギーに忠実な、いわば正統的な反応であつた。おおげさに言えば村垣は、徳川体制の「正統性」を一身に担って、アメリカの異端(夷狄)性と全面的に対決し、あっけなく崩れ去ろうとしている「鎖国」体制のほとんど最後の自己主張を表現したのである。その意味で村垣の日記はこの時書かれるべくして書かれたのであり、むしろ問題は、村垣の反応をもはやこの当時においてすら旧弊で特異なものに見えさせつつある、極端に言えばものわかりがよくて変わり身が早い周囲の人々の側にあるということもできよう。いづれにせよ村垣の記録は、開国期の異文化接触における貴重な記念碑だったことはまちがいない。⁽⁶⁾

次に佐野鼎の場合は、彼の意識・関心から見ても知識・能力から見てもいわばこの当時もつとも「新しい」人間でありながら、それゆえなのかそれにもかかわらずなのか、明らかにほとんど「カルチャー・ショック」を経験していない。それどころか第一印象さえ明確には持たれないのである。おそらく佐野においては、彼の行動様式や価値観は、徳川社会の正統的なそれらからは切り離されており、むしろほとんど西洋の科学・技術への関心のみで充たされている。極端に言えばそれだけが彼の背負った自己の「文化」なのである。しかもそれは、それを裏打ちしている西洋の科学・技術がもはや世界に普遍的な意味を持っているかぎり著しく普遍性を帯び、アメリカでもヨーロッパでも(科学・技術の分野に限れば)何ら違和感なく通用するものとなっている。したがって、アメリカ人の異質な文化的価値

観に根ざした行動様式に直面しても、関心が向かないためそれは彼の認識にほとんど侵入して来ず、科学・技術といういわば共通の「文化」だけを媒介として、その点からすれば彼と同等質なアメリカ人の行動様式に対する接触と観察をしつづけたために、「カルチャー・ショック」が起こり得なかったと考えられるだろう（あるいは佐野の「カルチャー・ショック」を云々するならば、彼がそもそも西洋の科学・技術に関心を持ちそれを学びはじめた当初の心理を問題にすべきかもしれない。が、それは不可能である）。

だからまた、技術者・技術官僚としての佐野の価値観と行動様式は、このように普遍性を帯びているがゆえに、幕末の徳川体制であろうが来たるべき明治新体制であろうがあるいは他のどんな体制であろうが、それが西洋技術の導入を許容すること（および彼が政治・社会に対して実践的関心を示さないこと）を前提とするかぎり、そのいずれにおいても有効かつ有用な役割を果たすものになることも当然であろう。しかしこのことは、本稿における他の主人公たちとの関連で見た場合には、非常に逆説的な結論を生むことになる。すなわち、出発点において村垣と佐野は、その夷狄意識にしろ西洋技術への関心にしろ完全に対極的な立場にあり、二人の間には全くどこにも共通点を見出せないにもかかわらず、帰着点において実は、村垣が使い分け方式によって関心を示した西洋技術導入の部分だけを、佐野は何らの不都合なく（村垣が持つイデオロギーの如何にかかわらず）技術者・官僚の職務として担当してゆくことができる。つまり二人は、来るべき日本の「近代化」に当たって共同戦線を張ることが——そんなことがもしあればの話だが——可能なのである。

とはいふものの、佐野が日記において政治・社会に対する直接的な関心を本当に持たなかったのかそれとも隠していただけなのかはともかく、以後の生涯においても彼がそれを全く持つことなく終わったのかどうかという可能性は、

否定も肯定もできない未知の領域に属する。その意味では、明治政府兵部省（途中陸軍省に改組）の幹部職に就きながらわずか一年余で辞してその後自ら創設した英語学校の運営に尽力していたという彼の後半生の中に、何らかの大きな思想的転回がかいま見られるかもしれないが（あるいはそれは単に官僚としての挫折というだけのものか、また単に後輩たる技術者・技術官僚の卵の養成という意味しか持たないものかもしれないが）、これを解明することは全く不可能である。⁽⁷⁾

最後に玉虫左太夫の場合は、彼の認識に表れた現象面から言うならば単なる心理的混乱状態を明らかに超えて、「カルチャー・ショック」の積極的效果、すなわち異質な文化を「解釈」しようとすることを通して「文化の相対性」を意識し「自分の行動の文化的源泉を見直」して「自分を客観視しようとする」側面が完全⁽⁸⁾に勝利を占めている。彼の日記もまた、村垣と同じく儒教観念が異質な文化と真正面から相剋し、かつその反応が村垣とは対照的な曲線を描いて旧来の価値観の中で異質な文化がどのような形で認識され評価されていくのかを如実に表現している点で、幕末維新期の西洋体験としては他に類のない稀有な（しかも潜在的意識としてはその後も方々に隠れていそうな村垣的パターンよりもっと稀少な）事例だといえそうである。もちろん玉虫のアメリカ理解が、その本質の把握という点では全く不十分であり、むしろ自己の既成観念を媒介とした「解釈」である側面が強いことは事実であろう。しかしこのアメリカ体験が彼にもたらした最大の意義は、そのようなアメリカ文化の「解釈」が正しいか否かにあるのではなく、自己とその文化的基盤とを客体化⁽⁹⁾できるような認識と思考を形成し、しかもそれが逆に認識し思考する自己の主体性を生み出そうとしている点にある。それはまた、自らの「過去」を「自覚的に対象化」しようとする思考だということもできよう。そして玉虫がこういった認識と思考を得つつあるとき、皮肉にも佐野の場合とは全く逆に、出発

点においては強固な夷狄観を持って対象を見ていたという点でほとんど同じ立場にいた玉虫と村垣は、帰着点においては、アメリカ理解についても日本に対する見方に関しても、ほとんど歩み寄りのない対極的な地点にまで引き離されてしまっているのである。

これらのような精神的、世界における自己の位置の劇的な変動にこそ、玉虫の世界像における最大の変化があったといふべきであろうし、そこに彼の「創造的思考」を生み出す端緒があるはずであったことはまちがいない。実際玉虫が往路の船中で見せていた「礼法」中心の日本の政治社会に対する批判とその改革を企図した考察については、「福沢が後に説く西洋を『モデル』とした社会制度改革への道が、玉虫においても、このときすでに予感されていた、というのに近い⁽¹⁰⁾」といわれており、とくに「我国ニテハ礼法愈厳ニシテ、從臣ト雖モ容易ニ御奉行ニ拝謁スルヲ得ズ、其威鬼神ノ如シ。是ニ從テ、其下少シク位アル者ニ至ルマデ大ニ威儀ヲ張り、各其下々ハ者ヲ蔑視ス⁽¹¹⁾」という玉虫の批判に至っては、福沢が後に『文明論之概略』（一八七五年刊）において、日本における政治權力のみならず「あらゆる社会的、文化的領域に潜んでいる人間関係の『構造』的特質を横断的に剔抉⁽¹²⁾」したという「權力の偏重⁽¹³⁾」（すなわち「抑圧の移讓⁽¹⁴⁾」）に対する徹底的な分析と批判を彷彿とさせ、それをほとんど先見的に予言していたに等しいといつても過言ではないだろう。しかし玉虫は、たとえその後の生涯においても彼の「創造的思考」を展開させるだけの可能性を保っていたかもしれないにせよ、結局我々の眼前にはそれを決して明らかなる形に示すことなく終わってしまったのである。福沢がその後「新しい知識人」として、「翻訳の職人」に身を徹すると言いながら政治的実践とは距離を置きつつ、数度の実り多い西洋体験を経て豊かな「創造的思考」を育んでゆき、戊辰戦争の真只中でも平常通りに塾の授業を続けて⁽¹⁵⁾、維新後に活発な言論活動を展開したのとは全く対照的に、その後仙台藩に帰っていく玉虫は、

知識人であるよりもまず実践的関心の強い武士であり、時機が来れば政治的実践の渦中に身を置かざるを得なかった。事実彼は戊辰戦争の波濤の中、奥羽越列藩同盟結成の主謀者としていわばもう一つの新国家の構想を抱いて奔走したあげく、結局自藩の反対派の手によって「反逆者」として処刑されてしまうのである。だとすれば、「新しい知識人」にはなり得ず(世代や地位の相違はさし置くとして)、ついに政治的实践者としてのみ生きたことに、玉虫におけるその後の思考の充全な展開が妨げられた最大の要因があったということになるかもしれない。⁽¹⁶⁾

ともあれ、九ヶ月余りに及んだ万延遣米使節の旅はこうして終着を迎えた。その随行者たちは、村垣はいうまでもなく玉虫にせよ佐野にせよ、思想的に見れば先覚者でもなければそこで重要な役割を果たしたわけでもない。しかし、「初めて西洋世界の現実と直面し、それとじかに接触するという経験は、圧倒的な力をもっていた」ために「彼らの先達たちが長い間に徐々に育むにいたったさまざまな観念を、しばしば素朴な形でだったが、一挙にわがものとさせるにいたった」という意味で「十年足らずの幕末海外見聞の思想史は、数十年にわたる視圈の拡大と世界像の轉換の動きの一コマであるとともに、ある意味で全体をその中含む縮図だった」とするならば、遣米使節随行者はその最初の布石となったのであり、しかも村垣から佐野まで多様な型でその体験を表現することによって、もっとも濃い密度の「縮図」を提示したといえよう。いわば彼らは、新旧両者を見通せる時代の縮図の中で、世界と外からの日本をかいま見て、「世界像の轉換」の濃密な「縮図」を表現し、それぞれの「未来」を、すなわち新しい日本の旅立ちを感じとったのである。

(1) このような事例としては、たとえば第一章2で挙げた木村喜毅、あるいは第三章の注80に挙げた福島義言の場合が、彼らの日記に表れている範囲でみるかぎり第一印象の意味がほとんど追求されず文化の異質性に対する意識が不十分だという点

で、比較的近いものだと思われる。

(2) 植手通有、前掲「対外観の転回」、三七〇四二頁。

(3) 「カルチャー・ショック」の定義および経過過程については、近藤裕『カルチュア・ショックの心理』、一九八一年、創元社、六二〇六四頁、およびジョン・コンドン『異文化間コミュニケーション』、近藤千恵訳、一九八〇年、サイマル出版会、まえがき一〇四頁、参照。

(4) ジョン・コンドン、前掲書、まえがき三頁。

(5) 橋川文三「村垣淡路の文明感覚」、同『歴史と感情』、一九七三年、未来社、五二頁。傍点は原文。

(6) ここで村垣範正の帰国後の生涯について略述しておこう。帰国直後の一八六〇(万延元)年十二月、彼は首席全権委員としてロシア使節オイレンブルグと折衝し、日普修好通商条約を調印した。翌六一(文久元)年三月、再び箱館奉行として箱館に赴任し、砲台建設等に当って同年一月に帰府した。この間、ロシア艦ボサドニック号の対馬滞泊事件に伴い箱館駐在ロシア領事ゴシケヴィチと対策を談判する一方、四月から七月にかけて『遣米使日記』の浄書をすすめたという。六二(文久二)年七月には箱館奉行を免ぜられて外国奉行専任となったが、翌六三年には作事奉行に転じ、さらに六四(元治元)年八月、西丸留守居となる。その後若年寄支配寄合を経て一八六八(明治元)年二月、病氣を理由として隠居し、淡叟と号した。一八八〇(明治一三)年三月一五没、六八歳。以上参照した文献については、第一章の注1に同じ。

(7) 帰国後の佐野鼎の生涯について略述しておこう。彼は翌一八六一(文久元)年一二月に出発した遣欧使節(正使竹内下野守保徳)に小使兼賄方として随行し、翌六二年、フランス・イギリス・オランダ・プロシア・ロシア・ポルトガルの各国を巡って一二月に帰国した。この時彼は蒸気船購入という藩の密命を帯びていたといい、また旅先ではアームストロング砲等最新兵器の図面の入手に努めた。帰国後の六三(文久三)年には「御軍艦乗込船将次官測量方等棟取役」に任ぜられて蒸気船の運用伝習にあたり、また同年「宮腰浦砲台築造方御用主附」および「異国船渡来之節応接方御用」を命ぜられた。さらに六四(元治元)年七月「壮猶館稽古方惣棟取役」に任命されて、本格的に洋式砲術の指導にあたることとなったのである(佐野の金沢来住はこの前後かと推測される)。また同年末、水戸天狗党の乱の拡大に際しては砲隊を率いて敦賀まで出役した。翌一八六五(慶応元)年一〇月には、七尾軍艦所(一八六二年壮猶館付属として設立)内に設置されていた製鉄所(『石川県教育史』第一巻、一九七四年、石川県教育委員会、九二頁、参照)に導入する蒸気機械をオランダから購入する

ため長崎に出張、この機械の到着に伴って一八六八(明治元)年には「陸蒸汽器械御開き方等主附」を命ぜられている(なおこの製鉄所は一八七〇年に設備一式が兵庫に移設されて加州製鉄所となり、七二年工部省に移管されて兵庫製作所となった後、八七年川崎造船所となる。『兵庫県史』第五卷、一九八〇年、兵庫県、八五三〜八五五頁、参照)。一方一八六七(慶応三)年四月、加賀藩は兵制改革を推進するために藩主直属の諮問機関「御軍事ニ付御内用」を設置し、佐野はこの任務を命ぜられて役料知一〇〇石を増された。彼はそこで騎兵隊の設置を具申して認められ、同年六月「騎兵御馬方御用」に任命されてその訓練にあたった。またこの年には「異国船渡来之節応接方御用」として数度領内に来航した外国船への対策にあたり、とくに七月、イギリス公使パークスが七尾に来航して新潟の代港としての七尾開港問題をもちかけ、さらに続いてパークスに随行していたアーネスト・サトウとミットフォードらが陸路大坂に向かった際には、それらの応接を行っている(アーネスト・サトウ『一外交官の見た明治維新』(一九六〇年、岩波文庫)の該当箇所「下巻、一四頁以下」に登場する加賀藩の「重役」佐野とは鼎のことである)。さて、加賀藩は一八六九(明治二)年、佐野を含む五人を留学生としてヨーロッパに派遣することとし、五人は同年四月に長崎を出発して香港に着いた。しかしここで太政官札大暴落の報に接したため(倉沢剛『幕末教育史の研究』第三卷、一九八六年、吉川弘文館、四〇八頁)、佐野ら三人が急拠帰国した(残る二人は予定通りヨーロッパに到着し、うち一人は外国人教師三人を招聘する契約を結んで翌年帰国)。この不在中に職制改革によって佐野は「一等上士」となり、また帰国後の六月に「学政所掛権少参事心得」となった。さらに翌一八七〇(明治三)年二月、「兵制掛」を兼任して東京詰藩兵の総括にあたるため上京したが、まもなく朝仕命令を受けて二月二二日に兵部省に出仕、「造兵司権正准席」に就任した(国立公文書館蔵『公文録——兵部省之部』)。その後同年一二月には「欧制屯所築造掛」を命ぜられていたが、翌七一(明治四)年七月二八日、「造兵正」に任命され、正七位の位記を受けた(『太政官日誌』明治四年第四八号、同覆刻版第五卷、一九八一年、東京堂出版、二九二頁。なお兵部省は翌七二年二月、陸軍省と海軍省に分割改組され、造兵司は陸軍省管轄となった)。しかし一八七一年秋、旧加賀藩主前田慶寧をはじめほとんど加賀藩関係の人々の協力を得て、佐野自身が「校主」となって東京神田淡路町に英語学校「共立学校」を設立、もはやこの経営に専念する意志をかためていたのかどうかは不明だが、造兵正のほうは翌七二(明治五)年三月に持病のリューマチ悪化のため治療したいとの理由で辞職願を提出し、これが受理された形で同年七月二〇日「依頼免本官 但位記返上」となった(国立公文書館蔵『公文録——陸軍省之部』。および『太政官日誌』明治五年第五五号、前掲覆刻版第六卷、一四〇頁。『陸軍省日誌』

明治五年第二〇号、同覆刻版第一卷、一九八八年、東京堂出版、一〇七頁。なおその後一八七二年一月二六日から七三年一月九日の一五日間〔改暦のため一二月は二日まで〕だけ陸軍省七等出仕となっている〔『陸軍省日誌』明治五年第三五号および明治六年第一号、前掲覆刻版第一卷、一九〇頁および一九九頁〕が詳細は不明。その後はもっぱら「共立学校」の運営に尽力していたというが、一八七七（明治一〇）年一〇月二日、おりから流行していたコレラに感染し、死去した。四七歳。「共立学校」は佐野の死後廃校になっていたが、たまたま校舎の隣の、学校設立の協力者でもあった元加賀商人の家に間借りした高橋是清の手によって、大学予備校として再興され（『高橋是清自伝』、一九三六年、千倉書房、一九七〜一九九頁）、後に開成中学、現在開成学園（高等学校・中学校）となっている。なお、とくに注記したもの以外の準拠および参照した文献については、第三章の注1に同じ。

(8) コンドン、前掲書、まえがき三頁。

(9) 丸山真男『日本の思想』、一九六一年、岩波新書、一一頁、参照。

(10) 加藤周一『言葉と人間』、一九八〇年、朝日新聞社、二五三頁。

(11) 玉虫「航米日録」巻八「三月十七日ノ事」、二三六〜二三七頁。傍点は引用者。

(12) 丸山真男『文明論之概略』を読む下、一九八六年、岩波新書、七一頁。および同、七六頁参照。

(13) 福沢が論じている「権力の偏重」の一例を次に掲げるので玉虫の文章と比べていただきたい。およそあたかも玉虫の文章に豊富な肉付けがなされていたかのように思えはしないだろうか。

「政府の吏人が平民に対して威を振ふ趣を見ればこそ権あるに似たれども、此吏人が政府中に在て上級の者に対するとき、其抑圧を受けること平民が吏人に対するよりも尚甚しきものあり。譬へば地方の下役等が村の名主共を呼出して事を談ずるときは其傲慢厭ふ可きが如くなれども、此下役が長官に接する有様を見れば亦慙笑に堪へたり。名主が下役に逢ふて無理に叱らるゝ模様は気の毒なれども村に帰て小前の者を無理に叱る有様を見れば亦悪む可し。甲は乙に庄せられ乙は丙に制せられ、強圧抑制の循環、窮極あることなし。亦奇観と云ふ可し。」（『文明論之概略』第九章、岩波文庫版、一八三頁）。

(14) 丸山真男「超国家主義の論理と心理」、同『現代政治の思想と行動』増補版、一九六四年、未来社、二五頁。

(15) 第三章の注39・42を参照。

万延遣米使節におけるアメリカ体験の諸相(三)完

(16) ここで帰国後の玉虫左太夫の生涯について略述しておく。翌一八六一(文久元)年一月、玉虫は『航米日録』を仙台藩主伊達慶邦に献上して賞賜を得、さらに新禄切米三両四人扶持(三五石相当)を受け、小姓組として藩士に列せられて正式に帰藩した。当初は江戸勤務学問出精を命ぜられていたが、その後藩校養賢堂指南頭取、さらに学頭副役となった。一方藩命により江戸内外や諸藩の情報収集にあたり、その報告書として「遊武記」「官武通記」「夷匪入港録」「波山記事」「薩州記事」「長州記事」「元治記事」「慶応記事」「西遊漫録」等が残されている。また彼は一八六三(文久三)年に「食塩製造論」を著わし、六五(慶応元)年には気仙沼において製塩場の建設に着手した。しかし、幕末の政情はやがて玉虫を政争の大渦中に巻き込んでゆく。一八六八(明治元)年一月、仙台藩に会津討伐の朝命が下るや、家老但木土佐をはじめ玉虫らは会津藩に同情し、かつ内乱は外国の侮りを受け国を滅ぼすとして会津に降伏をすすめることを提案し、三月、玉虫は正使に任ぜられて若生文十郎らと共に会津説得工作を開始した。しかし仙台の藩論は二分され、玉虫ら非戦派と会津討伐を主張する主戦派との対立は激化した。しかも家老但木までもがやがて主戦派に転じ、玉虫らは孤立してしまったのである。だが薩長軍の横暴に対して大きな反感が起り、とくにその参謀世良修蔵が斬殺された事件を契機に東北諸藩は結束を固め、奥羽二五藩(やがて越後諸藩も参加して三一藩)の連合「奥羽(越)列藩同盟」を結集させ、和解への道を模索することとなった。玉虫と若生はその「謀主」として奔走したのである。そして二人が立案したその計画書には『航米日録』において貯えられた知恵が活用されているのを見ることができるとも指摘されている(鶴見俊輔編著『記録現代史日本の百年1 御一新の嵐』、一九六四年、改訂版一九七七年、筑摩書房、八一〜八四頁)。しかし、玉虫らが意図した「平和コース」も空しく終わり、奥羽諸藩は次第に薩長軍に降伏していった。仙台藩内では、薩長軍に対して旧主戦派は降伏謝罪を主張、玉虫ら旧非戦派は徹底抗戦を主張して対立はさらに激化した。そしてついに九月、仙台藩は降伏し、玉虫らは朝命に反したという理由で藩から厳しく追及されることとなったのである。そこには玉虫ら開国派に対する尊攘派の長年にわたる敵意も介在していたという(鶴見俊輔、同前)。玉虫は仙台を逃れ、気仙沼に落ちのびた。蝦夷地へ向かっているという榎本武揚の艦隊に投じるためである。自分がその地に作った製塩場の塩をかき集めて持って行くつもりだった。彼は待った。だが榎本は来ない。追捕の手は迫る。もう艦隊は寄港する余裕もなくまっすぐ北海道へ向かってしまったのだという情報も受けた。玉虫はついにあきらめて気仙沼を去り、その日のうちに志津川で捕えられた。一〇月一三日のことだった。翌一四日、榎本艦隊の一隻が玉虫を迎えるべく空しく気仙沼に到着したという。一八六九(明治二)年四月九日、玉虫は切腹・家跡没収に処せ

られた。当初は禁固七ヶ月の刑だったが、周囲の圧力によって切腹になったという。四六歳。なお参照した文献は、第二章の注1に同じ。

(17) 松沢弘陽、前掲「さまざまな西洋見聞」、六七四頁。